ウエディングプランナー

三木七映

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ウエディングプランナー

【Ｎコード】
Ｎ９８２２Ｔ

【作者名】
三木七映

【あらすじ】
都心のとあるホテルで結婚式を挙げる人々の物語。伝統がある分、建物の老朽化が否めないこのホテルで、プランナー・安野ちあきが出会うカップルたち。彼らにはそれぞれ人生のドラマがあるのでした……。
実際に結婚式場で働いていた筆者の見聞きしたカップルたちがモデルです。オムニバス形式でいろんなカップルのお話を書いていきたいと思います。恋愛って言うより、人間ドラマかな。ラブラブべたべたはありません、ごめんなさい。

※第一話『咲の場合』第二話『優貴菜の場合』は完結しています。

９０日前

最終バスの扉が閉まった。

都会の一般的なタイムテーブルと比べると良心的ともいえる最終の時間に、十分間に合うように会社を出たはずだったがどうしても乗る気になれなかった。

一人の奇妙な女を残していくことをためらうように、のろのろとバスが走り去る。かろうじて何件かの飲み屋の明かりが見える程度の住宅街のバスターミナルで、咲はずっと自分の手を見つめ続けていた。

正確にはその指にはめた指輪の輝きから目が離せなかった。

自分が一番ほしいと思ったものではなかった。何ヶ月も前から雑誌やネットで下調べをして、何度も足を運んでショーケースを見つめては、それが自分の指にはまるところを想像した少しエッジの利いたデザインのものは、店の名前さえも聞かれることなく候補にさえ挙がらなかった。結局自分の意見が言えたのはサイズの付け心地のみで、すべて押し切られた形で決定された昔ながらのデザインのものだったが、それが左の薬指にはまっているだけで何か大きなものを手に入れたような気がしていた。

手に入れたような気がしていたものは何だったんだろう。たった電話一本で、それはただ自分の指にはまっているだけであり自分のものなのかわからなくなった。今まで一瞬も自分のものであったことなどなかったのかもしれなかった。

そう。健一が咲の、咲だけのものだったことなんてただの一瞬もなかった。

そのことに思い至って、指輪のはまった手をきつく握り締める。

それでもこれまでの付き合いで幸せだったことも確かにあったのに、だからこそ結婚を決めたはずだったのに一体それが何だったのか思い出せない。つい数時間前まであれこれと思い悩んでいたはず

の、ここ数ヶ月咲の頭の中の大半を占めていたはずの、結婚式のこともすべて遠いおとぎ話だったような気がしていた。
あたしは誰と婚約していたんだろう。
健一？
それとも……
名倉家？
婚約破棄って慰謝料請求できたよね、と他人のように頭のどこかで考えた。
寿退社の予定取り消したら、嫌味とかすごいだろうな。とも。咲が勤めるのは家族経営のちいさな商社で、結婚後も仕事を続ける女子社員は一人もおらず絵に描いたようなお局様が幅を利かせる昔ながらの気質だ。そこで左手の指輪を振りかざしながらお局様から開放される最高のゴールを切るはずだったのに、こうなってみると咲の結婚相手の年収まで社員全員が知っているような良く言えばアットホームな社風が針のむしろのようだ。
新卒のゴールデンチケットを使っても数十社に落ちるような氷河期の就活の記憶はまだ新しく、当てもなく辞めて転職するのは絶望的に思えた。あの会社で婚約者に捨てられた負け犬と後ろ指差されながら働くのと、派遣や契約社員で不安定な暮らしをするのとどっちが辛いだろうと真剣に考える。
あたし、
こんなことになってるのに何で。
ふと顔を上げた。
何で、健一に直接聞かないんだろう。
なぜ。どうして。あたしの何が悪かったの。他に好きな子でもできたの。聞きたいことは山のようにあるはずなのに、そんなことしても無駄だと頭の中で冷静な自分が言う。
もう状況はひっくり返らないから無駄、なのではなくて。
健一に聞いても答えは出ないのだ。確実に。
婚約までした咲だからわかる。

いつも咲さんのご意見を聞いてくださって、優しいですよね。ウエディングプランナーの安野ちあきは褒め上手で、健一のこともそう言ったが、健一のその姿は完全に外面だ。咲の意見など聞くようなフリをするだけで何一つ通してくれたことはなかった。ちあきに咲の意見が通っていたように見えたのは、結婚式についてはこうしなさいと、先に重々言い含められていたからだ。

「名倉様のご実家のこともきちんと考えていらっしゃって、咲さんは偉いですね」

褒め上手なちあきは咲のこともよくそう褒めた。結婚式の担当という職業柄、新婦の苗字が変わるからだろう。ちあきは健一のことは名倉様、咲のことは咲さんと呼ぶ。新郎には一線を引き、新婦には親しみを感じさせる。若いが信頼の置けるプランナーだ。憧れていたおしゃれなレストランではなく、歴史がある分建物の老朽化を感じさせるホテルでの結婚式になったことは不満だったが、ちあきのようなプランナーに出会えたことは幸運だった。

「でも、一生に一度のご結婚式ですから。名倉様のご両親のご意見ばっかりじゃなくて、咲さんのご希望も取り入れていきましょうね」

健一がいないときにそっとそう言ったちあきは、たぶん健一の外面には気付いている。打ち合わせの端々でどうにか咲の希望したものを決定しようと、さりげなく誘導してくれていた。印刷の出来上がったばかりの招待状が、四角四面の真っ白なものではなくて少しだけ花のデザインをあしらったものになったのは彼女の功績だ。

そんなちあきだから、この状況で健一ではなくまず咲に電話をかけてきたのだろう。

気遣わしげな声を思い出して、身が縮んだ。

名倉様のお母様が、結婚式をキャンセルするとおっしゃっているんですが。

咲さんのご意見も同じですか。

その声を聞いたときのいたたまれない気持ちの正体が、恥ずかしさだったと気付いて咲は衝動的に左の薬指からダイヤモンドの指輪を引き抜いて暗闇に投げ捨てた。

3年前

健一と出会ったのは3年前、よくある話だが合コンだ。
そのころの咲は友人に誘われるがままに定期的に合コンに参加していた。ときどき連絡先を聞かれたり、その後二人で会ったりもしたが、相手を好きになれたことはなかったし、向こうもそのようでいつのまにか自然に連絡が来なくなることがほとんどだった。
惰性のように出会い続け、携帯には顔も思い出せない男のメモリーばかりが増えていく。けれどもそれが２０代も後半に差し掛かった独り身の女の正しい姿のような気がしていた。
健一ともそのような惰性の流れで出会った。
ただ違ったのは、健一がやけに熱心に咲に話しかけ続け、わかりやすく咲狙いを周囲にアピールしたため、一件目を出た後に全員に言いくるめられて二人で放り出されたことだ。
ええと、とその状況で健一はのんきに言った。どうしましょう、と。
おかしくて吹き出した咲に、「こういう状況慣れてなくて」と、あれだけ積極的だったくせに本気で戸惑っている様子で、変に場慣れしている男よりよっぽど好感が持てた。
結局咲の誘導でお茶にして、少し話をした。
健一は名の通った建築メーカーに勤めているらしい。咲より五つ年上だったが、あまり冴えない朴訥とした話し方をした。
「咲さんみたいな女性を探してたんです」
「私みたいってどんな？」
「……仕事で男と張り合おうとしてないっていうか。優しくて、温かい感じがして」
それは、何年働いてもアシスタントとしてしか自分を見てくれない会社に嫌気が差している咲にとって、飛びつきたくなるような褒め言葉だった。

今日一緒だった他の女性は、総合職でバリバリ働いているようなタイプばかりだったので、健一が自分に執心したのも納得だ。
「……でも、そんな人いっぱいいますよ。私じゃなくても」
「僕、今日初めて参加したんです。こういう場」
冴えない話し方に似合わない強い口調で、健一は押してくる。「そこで理想の女性に出会った。運命だって思ったんです」
現実味がなさ過ぎて誰も口にしないような言葉で、健一は咲を口説き続けた。そんな風に誰かに運命の女性だと言われるなんてもちろん初めてで、言われたらクサくて引いちゃうだろうなと思っていた口説き文句は、実際に言われると照れくさいが心地よかった。
次の日からも健一は熱心に連絡をしてきた。
何度か二人で食事をして、その場で健一は終始咲をリードしてくれた。レディファーストが自然に身についている男性は身近に少なかったし、大切な女性として扱われるのは初めての経験だ。学生時代の彼氏はみんな友達の延長で、気を遣われたこともなければ支払いも常に割り勘だった。
何度か会ううちに家庭環境も見えてきた。会社役員の父親と専業主婦の母親。上に姉が一人いるらしいが、すでに結婚して家を出ている。長男なのは玉に瑕だが、条件面も申し分ないように思えた。朴訥とした話し方や垢抜けない雰囲気は、だんだん堅実で真面目という長所に思えてくるから不思議だ。
何度目かの食事で結婚を前提とした交際を申し込まれ、咲はもちろん快諾した。

89日前　1

「渡辺さん、今日指輪してないの？」
来た。
鬼のように目ざといお局様が、ロッカールームで咲の左手を見てすかさず指摘した。
「ちょっと、忘れてきちゃいました」
「ダメよ大事にしなきゃ。婚約指輪なんて今しか着けられないんだから。結婚したらタンスの肥やしだってよく友達が言ってるわ～」
あはは、と微妙に笑って話を合わせる。つまり、無駄なものをこれ見よがしに毎日会社に着けて来る咲に対しての当てこすりなわけだが、気付かないフリは後輩女子社員のたしなみだ。後輩といってもすでに３１でどの面下げてだが、お局様は噂年齢４０歳なのだから大先輩である。
結婚が決まって、やっと開放されると思っていたが……このまま勤め続けてお局様の年齢になった自分を想像して、一瞬めまいがした。
「そろそろ結婚式も打ち合わせに入ってるんじゃないの？招待状、楽しみにしてるわね」
さすが結婚式の出席回数も違うのだろう。お局様は準備のスケジュールにも詳しい。
あいまいに答えを濁して、咲は急ぎ足で会社を出た。

「６月２５日挙式の渡辺です」
ブライダルサロンの受付で名乗ると、スタッフは心得たように咲を一番奥の席へ案内した。
やがてばたばたと慌てたような足音がして、ちあきが現れる。

「こんにちは。お忙しいところすみません、お呼びだてして」
「いえ、こちらこそ……」続きの言葉は情けなくて小さくなった。
「お騒がせして申し訳ないです」
「名倉様とはお話されました？」
いつもは他愛のない世間話などで場を和ませてから本題に入るちあきだが、今日はさすがにすぐ話を始めた。表情も硬い。
「いえ……昨日の今日ですから」
「……そうですね、お忙しいですから」
さすがにこの状態でまだ本人同士が話をしていないとは思わなかったらしい。ちあきの言葉に一瞬間が空いた。
「私の方には今日もお母様からご連絡をいただいて」多少言いにくそうに続ける。「咲さんにご連絡がつかないっておっしゃってるんですけど……」
「連絡なんか来てません」
答えた声はうまくコントロールできただろうか。感情の波をちあきに感づかれなかっただろうか。
こんな……こんな恥をかかされて。
どうして自分から連絡なんか取らなきゃならない。
携帯の電源は昨日から切っている。だが、今朝と、ホテルに入る前と、二度電源を入れた。メールや着信があればわかる。けれど、健一からも、もちろん健一の母からも一度も連絡はなかった。
連絡がつかないなんて嘘ばっかり！
泣いて謝ってこないって意味じゃないの！
「……ホテルとしては、ご結婚式のキャンセルは双方の意思確認をしてからでないとお受けできませんから、今はまだ保留の状態なんですけど」
ひとまず事務連絡を済ませることにしたらしい。ちあきが手元の書類に目を落としつつ説明する。
「ご契約の際に利用規約をご確認いただいてますよね。あちらに記載のとおり、キャンセルの場合は規定のキャンセル料をいただくこ

とになってまして、名倉様から試算のご依頼があったので今日現在のキャンセル料をお出ししてます」
目の前に見積書が出された。
１００万円に少し届かないくらいの金額を目にして、咲は思わずちあきの顔を見た。ひどくばつの悪そうな顔で、おずおずとちあきが説明する。
「今日がご結婚式の８９日前ですので、規約上お見積もりの３０％の金額と実費総額を頂戴することになってます」
「実費総額って」
「ご招待状が刷り上ってますので……」
つまりはすでに注文したものの金額ということらしい。その他は何も残らないのにこの金額。契約時は聞き流していたキャンセル料の規約は、自分の身に降りかかってみると法外にしか思えなかった。
「申し訳ありません……心苦しいんですけど」
咲が何を思っているのかわかっているのだろう。ちあきは身を縮こまらせながら、皆様にお願いしていることなので、と小さく付け足した。
「もちろん実際にキャンセルになればの場合です。咲さんは、お電話ではそんなつもりないっておっしゃってましたよね？名倉様と良くお話されて、決めていただければ」
とりなすように懸命に言いつのるちあきは、当然キャンセルなど望んでいないのだろう。彼女の人柄なら、健一の母にも必死で食い下がってくれただろうと想像がつく。
少し気持ちが和んで、口を開いた。
「私、本当に寝耳に水なんです。義母（ははは）は何か理由を言っていましたか」
新婦が自分の結婚式をキャンセルする理由を知らないなんて、本当に馬鹿みたいな話だ。でも、ちあきならその理不尽さをわかってくれる気がした。
ちあきは以前にも健一の母に会っているのだ。

「詳しくはおっしゃってくださいませんでした。ただ、ご本人同士の事情だと」
嘘だ。健一とは二日前に連絡を取ったばかりだ。いつもどおりに電話で話をして、いつもどおりに切った。それ以来音沙汰はない。
いつもどおりに結婚式の話をして。健一がいつまで経っても招待客のリストを完成させないので、招待状が宛名書きに出せない。そのことを少し責めた。でもまさかそんなことで。
結婚が決まってからずっと、そんな小さな喧嘩は絶えなかったのだ。それが理由とは思えなかった。

89日前　2

「もしもですね。お日にちを延期とか、そういったことで解決できるようでしたら、キャンセル料をいただかずにご対応できる可能性がありますから。どうか良くお話になってみてくださいね。きっと何かの誤解だと思いますから」

咲の気持ちをなだめるように、ちあきはそんな話をした。でも、日にちを延期すれば済むような話ではないことは咲が一番わかっていた。

「それから……咲さん」

また、ちあきが言いにくそうに切り出す。「咲さんから私にご連絡があったら教えて欲しいと、名倉様のお母様から言われているんです。今日お会いしたことを、お話しても大丈夫ですか？」

健一の母は徹頭徹尾、咲に連絡をとる気はないらしい。

ちあきに申し訳なく感じながら、かまいませんと返事して、咲はホテルを後にした。

帰りにドレスショップに寄った。

ホテルの契約衣裳店で、咲がドレスを選んでいるところだ。二日後に小物合わせの予約をしてあったが、この状況では行けそうにない。予約を取り消して帰ろうと思った。

受付で名乗ると、担当の福井亜矢はたまたま手が空いていたらしく、すぐに顔を見せた。

「渡辺様！」表情は曇っている。「ホテルの安野から少し話を聞いたんです。大丈夫ですか？」

ちあきの手回しの良さに、咲は眉をひそめた。

「安野さん、こちらにまでうちの事情を話されたんですか」

「いえ、その……安野は心配してたみたいです。名倉様のお母様から衣裳のキャンセルの連絡がきても、まだ取り消さないようにっていうことで」
一瞬よぎった猜疑の気持ちが消えた。だが、その後続いた亜矢の言葉で咲はまた暗い気持ちになる。
「安野の連絡の後すぐ、名倉様のお母様からご連絡があって……結婚式を取りやめるから、衣裳をすべてキャンセルするっておっしゃって。こちらではできかねますってお答えしました」
「いつもご迷惑おかけしてすみません……」
恥ずかしさで涙が出そうだ。
亜矢は、健一の母を良く知っていた。衣裳選びに何度かついて来たからだ。
咲が選ぼうとしていたドレスを真っ向から否定して、一から選びなおさせた。咲はドレスだけはと抵抗して、亜矢は懸命にフォローしてくれたが、結局健一の母の意見が大きく反映されたものに決まった。
指輪も、ホテルも、ドレスも。一事が万事この調子だ。
そして最終的には結婚式そのものまで。
こらえかねて目が潤んだ。
そんな咲の顔を見ないフリをして、亜矢は明るく言った。
「明後日のご予約は取り消しておきますね。でも、小物合わせは早めにした方がいいので、お話合いが終わればまたご連絡ください。ご予約いっぱいの日でもねじ込みますから」
声音に気遣いを感じて、ますます涙をこらえるのが難しくなった。
ちあきも。亜矢も。結婚式は新婦の気持ちが一番大事だからと言ってくれる。そのたびに、自分の希望が何一つ通らない状況にささくれた気持ちがなだめられる。そして、ますます健一の家の考え方に嫌気がさす。
こうなった今、自分の中に健一と結婚できなくなることに対する抵抗の気持ちが見当たらない。

そんな自分に気付いて、咲はああ、とため息をついた。
「その必要はないかもしれません」
亜矢の顔が悲しげにゆがんだ。「そんなこと」
「きっかけはどうあれ、こんな風にされる家に嫁がなくて良かったかも。福井さんもわかるでしょ？」
健一の母を知っている亜矢は反論ができなかったらしい。また「そんなこと」と、もごもご言った。
「困らせてごめんなさい。衣裳のキャンセルは、話をちゃんとしてからご連絡します。でもたぶんキャンセルになるから、着たい人がいたら回してあげてください」
「それは……無理です」
生真面目にそう答える亜矢に、少し笑った。
昨日ちあきの連絡を受けて以来、初めて笑った。
「今度こそ自分の好きなドレスを着れるようにがんばります」
その言葉の意味を正しく理解したのだろう。亜矢は黙って、ぺこりと頭を下げた。

2年前

何かがおかしくなってきたのは、付き合い始めて一年経った頃だった。

結婚を前提とした付き合いのはずが、なかなかその話が出てこない。29歳を迎えた咲は多少焦りもあり、健一に対して急かすような発言が増えていった。

そして咲は強硬手段に出る。自分の両親が遊びに来たときに、健一に会わせたのだ。

咲の両親は健一を非常に気に入ったようだった。もともと咲の進路にはあまり口を挟まない両親だったが、安心した安心したと何度も口にしたところを見ると、口には出さないだけで三十路を間近に控えた娘の将来を心配していたらしい。両親は終始上機嫌で、対して言葉少なな健一の様子は、少し当てられているのかなと思っていた。

しかし、両親を見送った後、健一はひどい剣幕で怒り出したのだった。

「こんな風にだますようなことをする女だと思わなかった」「こっちにも準備というものがある。失礼だ」などと、今まで聞いたことのないような激しい口調でまくしたてた。

その時は、咲にもだまし討ちのように会わせた負い目があったので、ひたすら謝った。けれど、今思えばあれが違和感の始まりだったのだ。

次のデートに出向くと、そこには健一と共に年配の男女が一組座っていた。

「咲、紹介するよ。僕の両親」

「はじめまして、咲さんね。いつも健一がお世話になっております。健一の母でございます」

面食らってしまった咲はその日、何を話したのか良く覚えていな

い。終始母親が仕切り、健一が相づちをうち、父親は寡黙だった。
ひとつ思い出せるのは、咲の親戚構成をやけに詳しく聞かれた。健一の母親はその日、咲の家系図が書けるようになったはずだ。
後日、この日のことを健一にこう言われた。
「僕の気持ちがわかったか？」
つまり咲の強行手段と同じことをして意趣返ししたということで、根にもつタイプなんだなと学習した。夫婦喧嘩が面倒そうだと思ったが、まあ今のうちにわかって良かった、とも。
咲の中で健一と結婚するということは、実現してくれないと困る未来であり、多少違和感を感じても『夫婦は他人、いろいろ違って当たり前』という結婚の先輩の格言が真実味を増すばかりだった。
思いがけない形でお互いの両親と顔を合わせてからは、話は急激に進んだ。
健一の家に呼ばれて母親の手料理をご馳走になった。手伝いを申し出たが「いいのよ座ってて」と頑として拒まれた。台所が自分の城であるタイプの女性らしい。
健一の家は敷地内に離れがあるような立派な一軒家だった。「あの離れは今は使っていないのよ。あなたたちが結婚したら、あそこに住めばいいじゃない」など、会話はすべて結婚することが決まっている前提で話され、咲は大いに喜んだ。敷地内別居なら長男の嫁としては悪くない条件だ。
「新婚旅行はハワイがいいわ。私たちも行ったのよ、すごく良かったわ。ねえお父さん」
「ああ」
そんな会話が、当時は自分が受け入れられていると感じられて嬉しかったものだ。
「咲さんのご両親にもお目にかかりたいわ。こちらで場所を用意しますから、来ていただけるかしら？」
あれよあれよという間に両親同士の顔合わせがセッティングされ、その場でも結婚は決まったことのように話された。

「うちの健一は末っ子なので甘えたところがあって。咲さんのような方にしっかり家庭を守っていただけたら安心ですわ」
相変わらず饒舌な健一の母に、咲の両親は終始押され気味で、気付いたときには結婚式の時期だけなく費用が人数割り、衣裳代は各自持ちということまで決まっていた。いつの間にか結納は省略されることになっていた。
名倉家の面々と別れた後、父親がポツリと呟いた。
「咲。お前……本当に結婚するのか？」
咲としては、ところどころで健一の母の強引さは気になるものの、これまで鬱々と停滞していた結婚への流れが一気に動き出したことに満足していたので、答えた。
「するわよ？安心したでしょ、お父さんも、お母さんも。余計なこと言って向こうのおうちに嫌われるようなことしないでね」
父は何か言いたそうだったが、「お前がいいならいい」とだけ言った。

それから間もなく、咲の携帯に健一の母から直接連絡が入るようになっていた。
大概は週末の呼び出しだ。咲はほぼ毎週、名倉家に呼び出されてあれやこれやと手伝わされた。「あなたたちが住むから」と言われれば、離れの整理や掃除など手伝わないわけにいかない。いつの間にか、初めて来た日は断られた台所仕事も手伝っていた。健一はこれが好きで、あれが嫌いでと細かく教え込まれた。
当の健一は、何もせずだらだらとくつろいでいる。健一の父は家にいなかったり、いても書斎にこもっていることがほとんどだった。
気付けば二人だけで会うことはほぼなくなっていた。
呪文のように言い聞かせられたおかげで、咲には健一の好きなも

の、嫌いなもの、朝の出勤前にそろえておくもの、帰宅したときに用意しておくものなどが知識として叩き込まれた。同時に、結婚式についても。親戚が九州から来るし、やっぱりホテルでなくちゃ。格式があるのはあそこかあそこあたりね。ねえ咲さん、来週あたり健一と見に行ってらっしゃいよ。

「お義母さん、私、ホテルはちょっと、あまり」

「だめよ。ホテルでないと。親戚に顔向けできないわ。ああそう、指輪も買いに行かなくちゃね。知り合いのお店があるのよ」

咲は、自分が抜け出せない流れに飲み込まれていることに気付き始めていた。

情報誌などで思い描く結婚への流れと、何かがどこか違う。けれど、どうしたらそれを変えることができるのか、皆目見当がつかなかった。

85日前

「咲さん。このままでは、お話が進められません……」
電話の声は心なしかげっそりしている。ちあきからは毎日、同じ内容の電話がかかってきていた。
今日も健一の母から電話があった、先方はまだキャンセルを承知しないのかと言っている。ということだ。
咲の答えもいつも同じだ。何のことやらさっぱりわからないので、直接ご連絡いただけるようにお伝え願います。
間に挟まれたちあきはとんだ災難である。
「キャンセルなさらないなら、招待状をお出しにならないといけない時期ですし。一度、直接ご連絡されてみては……」
「私に折れろって言うんですか！」
「いえっ、あのですね」
途端にとがった咲の声に、あわててちあきが弁明する。「咲さんには、お心当たりがないっておっしゃいましたよね？きっと何かの誤解だと思うので、お話されるのが一番かと……」
「あちらが連絡してくるべきでしょ！」
八つ当たりとわかっているが、声が荒くなるのを止められない。
「……申し上げにくいんですが、咲さん。私、名倉様……健一さんにもお電話してみたんですけど」
おずおずと申し出たちあきの言葉に、咲は目を丸くした。
「あの人、出たんですか」
「……はい。あの、それでですね」
ちあきは相変わらず言いにくそうだ。良くない報告だとわかった。
「健一さんは、咲さんが自分からの電話には出てくれないとおっしゃってます」
「……嘘ばっかり！」
咲にはもうわかっていた。健一は母親の言いなり、母親がいない

と何もできない甘やかされたおぼっちゃまなのだ。こんな時なのに、咲に連絡など一度も寄越してきていない。もし健一に咲と結婚したい気持ちがまだあるのだとしても、母親に逆らえないのだ。

そのことに、ずっと気付かないフリをしていた。『結婚』がしたくて、目をつむっていたのだ。

こうなってみて初めて、それをはっきり自覚した。しかし。

それとこれとは話が別である。

「安野さん、ちゃんと伝えてくれてるんですか？私は結婚式を取りやめる理由がわからないから承諾しようがないって」

「もちろん申し上げてます！でも……」ちあきの声がだんだん小さくなる。「咲さんはわかってるはずだっておっしゃって……」

咲はため息をついた。

「……安野さんには申し訳ないと思ってます。でも、私がここでキャンセルを了承したら、向こうの思う壺じゃないですか。それが嫌なんです」

「私は大丈夫ですけど……」ちあきはそう言ったが、日に日に咲に対して折れて欲しい気持ちがにじみ出てきている。毎日あの母親とやりあっていれば、咲の強情もいい加減にして欲しいと思うだろう。

そう思ってそっと自嘲の笑いを浮かべた咲だったが、

「私はただ、このまま咲さんが悪者になってらっしゃるのは間違ってると思うんです」

日ごろのちあきとはかけ離れた、強い語調だった。

「ご結婚のことを誰よりも一生懸命進めてらっしゃったのは咲さんだって、私は知ってますから」

ちあきは結婚式と言わずに「結婚」と言った。

たいした意味はないのかもしれなかったが、咲にはそれが刺さった。

連絡を取ればきっと結婚はなくなる。理由はどうあれ、そうなることは目に見えている。そのために自分から連絡を取るなんて、負けるのと同じだと思っていた。でも本当は。

怖かったのかもしれない。本当に結婚がなくなることが。
「健一と結婚できないこと」じゃなくて、「結婚がなくなる」ことが。
健一と出会った3年前から、そのためだけに生きてきた。やりがいのない仕事、お局様の嫌味。同期や友人の結婚・出産。冴えない自分の人生が、結婚することで誰もがうらやむ安定した人生に変わるはずだと信じていた。そのためなら、あの強引な母親にも耐えられた。
理不尽をすべて飲み込んで、違和感を感じないフリをして。
咲なりに一生懸命その日のために生きてきたのだ。
いきなり、そのゴールが間違っていたと気付かされても……心がついていかない。
「だって……私の何が悪かったんですか！」
気付くと、咲は大声で怒鳴っていた。
会社帰りの人々がひしめく往来で、周囲がぎょっと目を向ける。
「だいたいいつも勝手に決めて勝手に進めて、私の希望なんか聞いてくれたこともないくせに何がキャンセルを承諾しろよ！口ばっかり出して金は息子の分しか出さないくせに！婚約破棄の理由だって、あのぼんくら男が『なんか結婚するの嫌になってきた』って言ったとかどうせそんなことでしょうよ！」
堰が切れて口が止まらない。涙も出ているようだがかまうもんか。
「あの男は格好ばかり一人前で何一つ自分で決められなくて、私に声かけたのだって母親が言ってた女性像に一番近い女だったからよ！知ってるんだから！だいたい私、プロポーズもされてないし実家に挨拶にも来てもらってないし」
ささやかな夢だったはずだ。普通の優しい真面目な男性と恋をして、望まれて結婚したかった。ただそれだけなのに。
どこで間違ってしまったのか、もう咲にはわからない。
「……普通に結婚もできないなんて」
先方がめちゃくちゃなのだとわかっていても、女として否定され

た気持ちは消えない。
「咲さん」
電話の向こうで、黙って聞いていたちあきが強い声で呼んだ。
「私に任せてもらえますか。咲さんが負けないように、私が協力しますから」
涙でぐしゃぐしゃの顔で、咲は目を瞠った。ちあきは続ける。
「公私混同ですがお許しください。一人の女性として、お手伝いさせてもらいたいんです」

対決　1

ちあきにホテルへ呼び出されたのは、それから二日後のことだった。

その日は一日仕事が手につかず、お局様の嫌味を聞きながら上の空ですごし、定時になるやいなや会社を飛び出した。

受付のスタッフに、いつもの打ち合わせブースではなく個室へ案内される。会議などで使う小宴会場のようだ。

ちあきは先に部屋で待っていた。

「これからここに名倉様とお母様がお越しになります」

挨拶もそこそこに、緊張した面持ちでちあきは言った。

電話で詳細は知らされていなかったが、おそらくそうだろうと思っていた咲は無言でうなずく。

「私は立場上、ご両家のお話に口を挟むことはできません。なので、お気持ちは咲さん自身でお話しください。ご納得はいただけないかもしれませんが、万一のことも考えて男性のスタッフにも控えてもらってますので」

ちあきは、咲が折れずに戦う場所を整えてくれたのだ。

とうとう今日まで健一からの着信音を鳴らさなかった携帯を、一度強く握り締める。そしてそれを鞄にしまって、代わりに別のものを取り出す。

手のひらにおさまるくらいの小さな箱。

それを両手でしっかりと持ち、咲は奥の席に腰を下ろした。

「どういうことなの、これは！」

部屋に入って咲の姿を目にするなり、健一の母はちあきに向かってきつい声を放った。

「キャンセルするために必要な手続きがあるからって、人のことを呼び出しておいて……！何のつもりなの！」
「ですので、キャンセルをお受けするにはご両家の意思の確認が必要だと申し上げました」
ちあきは営業スマイルでしれっと母親の怒りを受け流した。「この場で確認させていただければ、本日付でのキャンセルを承ります。どうぞお座りください」
黒子のように控えている男性のサービススタッフが、二人分の椅子を引いた。
しぶしぶといった体で、健一の母親と……部屋に入ってから一言も発さずに咲を見つめ続けている健一が、その椅子に座る。
健一の顔を見るのは１０日ぶりだった。少しやせたかもしれない。
サービススタッフが運んできたお茶をひったくるように飲んで、母親がまたちあきに向かって口を開いた。
「だいたいあなたがいつまで経っても話をまとめないから悪いんじゃないの。いつまでも引き伸ばして、キャンセル料が上がったりしたら承知しませんからね！」
「もちろん先日お見せした見積の料金以上はいただきません。ですので」
ちあきは鉄壁の笑顔で、咲の隣の席から腰を上げた。「どうぞ直接お話しください。私を介してのお話では、お手間もかかりますから」
席を離れたちあきは、部屋の入り口脇に立って話を見守る構えを見せた。
その場所は咲とも目が合わせられる場所で、強い目線に励まされて咲は口を開いた。
「健一」
呼ばれた健一がおびえたように肩を揺らした。
「私は結婚式をしないなんて聞いてません。どういうことなのか、ちゃんと説明して」

「咲さん、あなたねえ」母親が割って入った。「こんなことになって、謝って欲しいくらいだわ。名倉家の嫁として、あなたは」
「黙っててください！」
咲が荒げた声に、健一はまた肩を揺らし、母親は鼻白んだ。
「私は健一さんに聞いてるんです！あなたには関係ありません！」
「か……関係ないなんて」
「健一！」母親を無視して咲は健一に向かって身を乗り出した。「ちゃんとしてよ。どういうつもりなのか教えてくれないとわからない」怒鳴りたい気持ちを精一杯抑えて、咲は懇願した。
「私のことが嫌いになったのなら、ちゃんとそう言って。そのくらいできるでしょ？」
「そういう……そういうところが嫌だったんだよ！」
健一が泣く寸前のように顔をゆがめて、叫んだ。
「『ちゃんとしてよ』だの、『できるでしょ？』だの、えらそうに言いやがって！僕を何だと思ってるんだ、母親みたいに上から目線で、そういうところが嫌になったんだ！」
「健一があなたは嫁にふさわしくないと言ったから、結婚は取りやめることにしたんですよ」母親がしたり顔で言い、健一を慰めるように顔をのぞき込んだ。「ねえ、あなたは何も悪くないものねえ？」
「うるさい！」
健一は母親にも怒鳴った。「母さんは黙っててくれ！」
母親は目を見開いて固まった。
咲も驚いた。健一が母親に反抗するところなど初めて見た。
「僕がちょっと咲のことが嫌だと言ったからって、こんなに事を大きくすることないじゃないか！確かにあの日は咲に怒られて落ち込んでたけど、本気で嫌だと言ったわけじゃなかったのに！」
「「えっ」」
驚いた声は咲と母親、同時に上がった。
健一はもうほとんど泣いていて、ゆがんだ表情とうろたえた様子はとても３６歳の男とは思えなかった。

「母さんが勝手に話を進めるから、咲のこともまた怒らせたと思って連絡できなかったんだ！僕は結婚をやめる気なんてなかったんだ！ただ、咲には母さんみたいに偉そうになって欲しくなくて、出会った頃のかわいい咲に戻って欲しくて、僕は」

母親はわなわなと震えて声も出ない様子で、健一はみっともなく取り乱している。

咲の中で、何かが急速にすうっと冷めていった。

対決　2

「安野さん」
咲は、入り口脇に控えているちあきを呼んだ。
「私がキャンセルを承諾すれば、キャンセルになるんですよね？」
「はい」
「承諾します」
「咲！」
健一が涙声で叫んだ。「許してくれ、咲！もう怒られても文句言わないから！咲が結婚してくれなきゃ、僕はどうなるんだよ！」
「あんたはお母さんの言うこと聞いとけばいいじゃないの」
情けなくて声に力が入らない。これまでの3年間にあったことが、ぐるぐると頭の中を通り過ぎていった。
健一の、真面目なところが好きだった。……それは、母親に余計なものをシャットアウトされて生きてきただけだったのだ。
何のとりえもない自分を選んでくれたことがうれしかった。……それは、自分に対して母親のように指示をしない、弱い女を探していただけだったのだ。
この一週間連絡もよこさず、何を考えているのかと思えば、咲が怒っているだろうから……だなんて。自分のことばかり考えて、咲の気持ちなど何も思いやらず。
……咲がどれだけ辛かったか、女として否定されたような、今までの3年間すべて無駄だったような、どれだけ胸がつぶれそうな思いを味わったかなんて。
この男は一生わかってはくれないのだ。
「こちらからもお願いします。結婚のお話は、なかったことにしてください」
もう直接話す気も起こらず、咲は呆然としている母親に向かって話した。

「婚約破棄はそちらから言い出されたことですから、私、慰謝料などもお願いできる立場だと思いますけど。何もいりませんから、今すぐ私とは縁を切ってください」
そして、両手で握り締めていた箱を差し出した。
「キャンセル料はまあ、多少お支払いしないといけないかな。でも、私は結納金もいただいてないし、お出しできる現金はないので、これを支払いに当ててください」
見覚えのある箱だったのだろう。健一がますます顔をゆがめる。
それは、健一から受け取った婚約指輪だった。
一度は投げ捨てたものの、やっぱり捨てられなくて拾って持っていたものだった。
「何ヶ月か身に着けていたので価値は下がってるかもしれませんけど、まあダイヤモンドだし買い取ってもらえると思うので。お値段は私、存じませんけど」
健一の母親がわなわなと震えて、何か言いたげに口をぱくぱくと動かした。
あれだけケチな家だ、たいした値段のものではなかったに違いない。でも、咲の知ったことではなかった。
最後に改めて、健一にまっすぐ顔を向ける。
「母親みたいに偉そうで、悪かったと思ってるわ。でも、あなたはお母さんが大好きだから、それでいいと思ってた。私はこんなだから、もっとかわいくて優しい女の子探して。で」
指輪の箱を机において、鞄を手に立ち上がる。
「今度はちゃんと、プロポーズして、親御さんに『娘さんをください』って言いなさい」
最後に母親に顔を向けた。
「お義母様、いろいろ教えてくださってありがとうございました。でも、やっぱり健一さんのお世話はお義母様じゃないと無理みたいです」
お世話になりました、と深々お辞儀して、咲は背筋を伸ばして部

屋を後にした。
部屋を出るときに目が合ったちあきが、後は任せろというように目配せをよこした。

ホテルを出ると、街はすっかり夜だった。
飲み屋の客引きが張り上げる声、行きかう人たちのざわめきが全身を包むように咲のまわりを満たした。
ここに立つ咲は、左手薬指に指輪を持たない、特にやりがいのある仕事をしてるわけでもない、健一と出会う前と何ら変わりない一人のちっぽけな女だ。
でも……咲は、自分で選んでここにいる。
自分で健一と結婚しないことを選んだ。
そのことが、驚くほど咲を強くする。
そうか、と思った。結婚できなくても、自分で選んだ道なら進んでいけるんだ。
駅に向かって歩き出す。駅に隣接したホテルなので、すぐそこだ。
少し考えて、方向を変えた。どこかで一人、打ち上げ代わりに飲んで帰るのもいいかもしれない。これまで、そんなことする女は彼氏がいない風でみっともないと思っていた。
自分が選んで一人でいるなら怖くない。
思えば、これまで自分で何かを選んだことはなかったように思う。手当たり次第に受けた会社での仕事、声をかけられての付き合い、健一の親に強引に進められての結婚。
少しがんばれば、結果は違ったのかもしれない。今、この瞬間のように。
「おねーさん、ひとり？俺らと一緒に飲まないー？」
すでに出来上がっているサラリーマンの集団に声をかけられた。
「今日は一人で飲みたいんで。ごめんなさい」

足を止めずに軽くあしらう。何か文句を言っているのが聞こえたが、気にならなかった。
明日、会社に行ったら何て言おう。退職を今更取り消して大丈夫だろうか。しばらくはお局様の嫌味もすごいだろう。でも、今ならなんとなく、お局様ともうまく話せる気がした。
しばらくあの会社でがんばって、何か資格でも取ろうかな。
起業なんていうのもいいかもしれない。
そして、自分の意思をはっきり持って、男を選ぼう。
高望みはできないかもしれないけど、自分が居心地よくいられる相手を探そう。
「できれば、実家が遠い次男がいいなっ」
小さくつぶやいてひとり笑った。
羽が生えたような軽い足取りで、咲は人の波の中へと歩いていった。

エピローグ

「安野さん、名倉様からキャンセル料振り込まれたよ」
会計チーフの庄野に声をかけられ、ちあきは思わず「よかったぁぁぁ～」と机に突っ伏した。
「ごねられる気はしてたけど、あんなにごねるとは予想外でしたぁ～」
「ホントにね。ぜんぜん理屈通ってないのになんであんなに堂々と主張できるんだろうね」
咲が婚約指輪を突っ返したあの日から、3週間がたっていた。
事実上キャンセル料の支払いを押し付けられた名倉家の母親は、今度は金額に難癖を付け出した。挙句の果てには破談になったのはホテルのせいだ、ホテルが新郎新婦に負担をかけすぎて二人の喧嘩に発展し破談になったのだと、ほとんどやくざのような言いがかりである。
「うちの宝田マネージャーじゃなきゃ、根負けして値切られてそうだよねー」
隣の席の同僚・守屋未来も話に入ってきた。新婦に無断で結婚式をキャンセルしようとした新郎の話は、当然のことながらスタッフ全員が知っている。
破談でのキャンセルはままあることだが、ホテルを巻き込んでの泥沼劇はさすがにそうあることではないので、ちょっとしたスキャンダルだったのだ。
キャンセル料の交渉などはちあきのような下っ端では先方が納得しないので、上司である宝田マネージャーに一任していた次第である。
「ったく、安野の客はいつも一癖あるんだからな」
その宝田が、奥の席から口を挟んだ。
「お前も、キャンセル料押し付けるのに加担するようなことしやが

って。おかげで骨が折れたぞ」
「すみませ～ん……」
ちあきは自分の席で小さくなった。出すぎた真似をしたことは自覚している。というか、確信犯である。
「だって、あの新郎どうしても女として許せなくって」
「どんなに納得いかない縁組でも、契約してもらった以上は結婚式をつつがなく挙行するのがお前の仕事だ。肩入れしすぎると痛い目見るぞ」
「気をつけます……」
確信犯だったが、上司に迷惑をかけたことは事実だ。キャンセルになっただけでも売上減なのに、先方を怒らせて、キャンセル料を取りっぱぐれても文句は言えない。あの後は宝田にも散々説教を食らった。会社に損益を出すところだったのだから、会社員としては失格である。
「でも、まあ」
宝田が席を立ち、ちあきの頭を軽くはたいた。「客観的に見て、あの新婦はこうなってよかっただろうな。キャンセル料は全額入ったんだから結果オーライだ。俺に感謝して、実施分との差額は体で返せ」
「マネージャー、セクハラですよー」
未来が揚げ足を取ってけらけら笑う。４０代半ば、責任者としては若い年齢とその態度で、上司というより先輩のような気安さなので会話はいつもこんな調子である。
「守屋、うるさい。売上あげて返せって言ってんだ」
じろりとちあきを見下ろして、聞かれる。「だいたい２００万ってとこか。できるな？」
「はい！」
勢い込んで答えると、にやりと笑われた。
「いい返事だ。今日の新規、出るか」
「行きます！」

「新婦妊娠３ヶ月の直近客だ。絶対取れ。５０万までなら引いていい」
「ありがとうございます！」
立ち上がってぺこりと頭を下げ、準備のためにちあきは小走りで席を離れた。
口は悪いが、自分が思い切って客にぶつかっていけるのも、宝田が上司であるからこそだ。責任を受け止めてくれる上司がいるから、多少の無茶も通るのである。
あの人とは正反対。ついさっきまで俎上に乗せていた「新郎」、名倉健一の顔が浮かぶ。
あの男は責任をすべて母親のせい、咲のせいにして、逃げまくる最低の男だった。ホテルに見学に来た当初から、この新郎に話をしてもらちがあかないとちあきは見抜いていたのである。
なので、連絡はすべて咲の方にしていたのだが、正直……咲は咲で、細かいところまで口うるさいところがあり、ちあきは苦労していた。
今思えばあの母親に突っ込まれないように必死だったのだろう。
あの騒ぎの数日後、咲はちあきに礼を言いにホテルに来てくれた。
「違う相手と結婚することになったら、また安野さんにお願いします」
そう言って笑った咲の表情は、今まで見た中で一番晴れやかで、魅力的だった。
あの顔を見れたのだから、説教のひとつやふたつ、へっちゃらである。
「さーて、授かり婚かぁ。ぜったい、うちで挙げてもらわないとねっ」
宝田に振られた新規見学のカップルを案内するために、ちあきは軽い足取りでチャペルへ向かった。照明を本番仕様にして、当日のイメージをしてもらうのである。多少建物に老朽化が見られる分、見せ方や話術でどれだけ夢を持たせられるかが契約を取るキモなの

だ。

安野ちあき。職業・ウエディングプランナー。

出会ったカップルの幸せな顔を見ることが、この仕事の何よりのやりがいである。

エピローグ（後書き）

第一章、「咲の場合」完結です。いきなり破談の話で失礼しました。実際の現場では、ちあきのような手助けはなかなかできません…「出すぎた真似」になってしまうので。でも、お話の中では思い切って動いてもらいました。

次の話はぜひ幸せなカップルの話を書こうと思います。幸せなカップルにも、結婚前にはいろいろあるので（笑）

9w0d

「……ここでいいんじゃない？一番安くしてくれたし、大安だし」
「そうだな。一番駅にも近いしな」
結論が出たことで安心し、優貴菜はふぅーっとため息をついて椅子の背にもたれた。
「難しいこと考えすぎてキモチワルクなってきちゃったぁ……」
「えっ。大丈夫か？飲み物もらうか？」
昌弘があわてて優貴菜の背中をさすってくれる。その時、計っていたかのようなタイミングで、受付の女性スタッフが顔を出した。
「お飲み物、お取替えしましょうか」
「あっはい。お願いします」
ほどなく、冷たいお茶が差し替えられる。氷の入った飲み物は、のどごしが良くて少し胸がすっとする気がする。
二人がお茶を飲んで一息ついたところで、安野ちあき――二人が結婚式の見学に来たホテルのプランナーが戻ってきた。
「お疲れ様です。お二人で話されて、いかがでしたか？」
「あ、はい。こちらにお願いしようと思います」
笑顔で問いかけたちあきに昌弘が緊張気味に答える。ちあきの笑顔がさらにぱっと明るくなった。
「ありがとうございます！では、お申し込みいただけるということで。もし宜しければ、このままお申し込み手続きに入らせていただいて大丈夫ですか？」
「あの、それって予約金とか」
「予約金として１０万円お願いしております。今日の今日ですので、ご用意がなければお振込みでも、クレジットカードでも結構ですよ」
１０万円。二人にとってはかなりの大金だが、あらかじめ聞いていた金額だったのできちんと用意してある。用意してくれたのは、昌弘の両親だが。

「大丈夫です。お願いします」
「かしこまりました。何度もご足労いただくと、優貴菜さんのお体も大変ですからね。お打ち合わせもできるだけまとめてやりましょう。今日お時間宜しければ、招待状も決めてしまいませんか？」
てきぱきと話を進めるちあきは、頼り甲斐がありそうだ。年が近いのも安心できる。今日、ここに来る前に見学に行った別のホテルではおばさんのプランナーが出てきて、優貴菜はちょっと苦手だった。冷たい飲み物は体を冷やすからやめた方がいいとか、変にお母さんぶって注意してきたり。今は冷たいものでないと飲めないのだから、放っておいてほしい。
「優貴菜、時間かかって大丈夫か？」
昌弘が聞いてくれる。見学で疲れて気分は良くなかったが、ちあきの言うとおりまた出直してくるのもおっくうだった。
「大丈夫。がんばる」
「わかりました、できるだけ手早くしますね」
ちあきが笑いかけてくれる。何もわからなくて不安だったが、その笑顔で少し安心した。
「では、この申込書にご記入お願いします」

「安野、即決～。よくやった！」
事務所に戻ると、上司の宝田が待ち構えていて肩をバシッと叩かれた。
即決とは、見学に来たその場で契約が決まることである。大金が動く結婚式の予約ではよっぽど会場が気に入るか、当人たちが急いでいるかでないとそうはならない。
今回は後者だった。というか、建物が古いこのホテルでは即決の理由はだいたい後者である。
「キャンセルになった6月25日か。自分で手放して自分で埋めた

な〜」
「……大安のいい時間が空いてたので喜ばれました」
「良かったじゃないか」
素直に喜んでいいかわからず、ちあきは渋い顔をする。つい先ほど契約が取れた6月25日には、先日までちあきの担当していたカップルの予約が入っていた。しかし結婚が破談になったために空き、今日来た二人が代わって予約したというわけだ。
「2ヶ月前なのに大安が空いてて、怪しまれなかったの？」
同僚の守屋未来が尋ねる。6月は割と人気のあるシーズンだ。しかも大安となれば他のホテルでは軒並み予約で埋まっているだろう。
それが空いているということは、よっぽど人気のない会場か……キャンセルが出たか。そのくらいは素人でもわかる。
しかしちあきは片手を振った。
「ぜーんぜん怪しんでなかった。ラッキー！って感じ」
「へー、若いの？」
「新郎22歳、新婦20歳」
「わー若い。妊娠3ヶ月だっけ」
「9週目だって。つわりが辛そうだった」
通常1年から半年前に申し込む結婚式を、2ヶ月前に急いで申し込んだのはそういう理由である。
申込書類を処理しながら、先ほどの優貴菜の様子を思い返して、ちあきは顔を上げる。
「それでね、聞いてよ守屋。なれ初め聞いたら、付き合い始めたのが2ヶ月前なんだって！」
「えー短い。2ヶ月って……あれ？」
未来が身を乗り出した。
「妊娠3ヶ月だよね？」
「9週目」
「だから9週間前だよね？計算合わないねえ……イマドキの子だねえ。大丈夫なの安野」

「がんばってテンションあげて同じノリでいくか、頼りになるお姉さんキャラでいくか迷って後者にした」
「あはは、がんばれー」
「お前らも大して変わらんだろうが、ガキどもめ」
奥の席に戻った宝田があきれたような調子で突っ込んだ。「とっとと処理しろー。俺の仕事が終わらん」
「はぁいっ」
ちあきと未来は、あわてて自分の仕事に戻った。

9w6d

交際2ヶ月で妊娠3ヶ月の謎はすぐに解けた。
「最終月経開始日が0週0日になるからね。実際に排卵して受精するのは2週目ってとこよ」
既婚子持ちである庄野が、昼休みに社員食堂で一緒になったときに苦笑しながら教えてくれた。
「9週目ならちょうど受精してから2ヶ月って感じね。お付き合いしたその日にってとこじゃないの」
「庄野さん……なんか、生々しいです」
あけすけな物言いに、ちあきは赤面した。その様子を見て庄野はあきれたようにまた笑う。
「計算合わない～！なんて言ってる方がよっぽど生々しいじゃないの。安野さん、顔に出したりしてないでしょうね」
「してませんよ！」
「それにしても、ハタチか～。うちの娘がそんなことになったらどうしよう」
庄野の娘は幼稚園児である。早すぎる心配だが、娘を持つ親の率直な感想だろう。
「学生？」
「いえ、二人とも働いてるみたいですよ」
「なら、まだいいか……よくないけど。親御さんは厳しそう？」
「全然。二人に任せてるみたいです。リボン柄の超ラブリーな招待状選びましたからね」
招待状のチョイスは、結婚式全体における新郎新婦本人の選択自由度を示すバロメーターである。多少なりとも親の意見が入ってくると、かっちりとしたデザインが選ばれる傾向にある。
あの二人はちあきが「よかったら親御様にもご相談されて……」と言うのを気にも留めず、優貴菜の「これカワイイ！」で決定だっ

た。
「親御さんも若いのかしらね」
「４４歳って言ってました」
「４４……！」今年３７歳になる庄野はよろめいた。「４４で孫ができちゃうのねー……友達親子って感じなのかなあ」
「あ、今日ドレスお母さんと見に行くって言ってました。仲いいみたいですよ」
「娘のドレスかぁ……」
庄野は親として思うところがあるらしい。何かいろいろショックを受けた様子で、「がんばってね～」と言い残して立ち去った。
さて、とちあきも腰を上げる。今ごろ優貴菜は、ちょうど試着をしているはずだ。帰りに印刷を急がせた招待状を取りに来ることになっている。
「ドレス、残ってるかなあ」
少し心配になりながら、事務所に戻るために食堂を後にした。

「ええーっ、これもダメなんですかぁ？」
「申し訳ありません……ご予約が入っていて」
落胆した優貴菜の様子に、ドレスショップで担当についてくれた福井亜矢は申し訳なさそうに首をすくめた。
「じゃあこれは？」
「こちらは１１号サイズまでになってまして……」
「えー、じゃあどれが大丈夫なのか教えてください～。そこから選んだ方が早そう～」
「わかりました、お調べしてきますね」
亜矢が足早にバックスペースへ消えた。
優貴菜はため息をつく。
「ドレス楽しみにしてたのになー。もうほとんど残ってないんだね」

「もう二ヶ月前だものねぇ」
一緒についてきてくれた母親も、残念そうな表情だ。
とにかくドレスはできるだけ早く見に行ってください。ちあきにそう言われて、空いていた一番近い日に予約を入れた。体調は相変わらず優れなかったが、ドレスを選ぶのは純粋に楽しみだった。
おなかおっきくなってもドレスって着れるんですか？
優貴菜が聞くと、ちあきは「最近はマタニティサイズも充実しているので、サイズの心配はないですよ。ただ……」と表情を曇らせた。
「お日柄がいい日なので、人気のドレスはもうおさえられているかもしれません」
果たして、ちあきが言ったとおり……パンフレットから試着するドレスを選ぶ時点で、先約ありの連発で出鼻をくじかれてしまった。
亜矢の説明によれば、マタニティ対応のドレスでなくても、普段9号の優貴菜なら13号くらいのドレスが着れるらしい。しかしその13号のドレスも、誰かが同じ日に予約を入れていれば当然着られない。
ドレスショップは10階建てのビルで、そのうち半分がドレスのフロアだった。こんなにドレスがあふれているのに、かわいいドレスどころか空いているドレスを探すのにも苦労するなんて。
「なんか、ユウウツになってきちゃった」
母親に甘えるように愚痴る。「モデルのルナがプロデュースしてるドレスとか着たかったのになー。CMでやってる、リボンのやつ」
「確かにかわいいわね、あれは。ママもああいうの着てみたかったわー」
44歳の母親とは服を共有する仲だ。一緒に歩いていると姉妹に間違えられるほど見た目も若い。話をしていても、母親というより親友のような感覚だ。
その母が言った。
「優貴ちゃんは何着てもかわいいから、きっと大丈夫よ」

「でもダサいのしか残ってないかもー。あーあ。おなかもおっきくなってカッコ悪いだろーなー。やだなー」
「優貴ちゃん」
普段おっとりした母親が、めずらしく怒った声を出した。
「そんなこと言わないの。おなかの赤ちゃんがかわいそうよ」
「……はーい」
しぶしぶ黙ったが、優貴菜はふくれた。おなかの赤ちゃんって言っても、まだあんなちっこいし、どうせ聞こえてないもん。いーじゃん、愚痴るくらい。だいたい好きで妊娠したんじゃないし。
「お待たせしました！」
亜矢が資料を抱えて現れ、優貴菜の思考は中断された。１３号で６月２５日に残っているドレスは何とか十数着あり、その中から数着試着して、まあまあ納得がいったものを予約しておく。
結婚式で一番楽しみだったドレス選びが不本意だったので、優貴菜は「マジへこんだー」と昌弘にメールを打った。

10w0d

ドレス試着の次の日、優貴菜はホテルで受け取った招待状を持って昌弘の家を訪れた。もう二ヶ月前を切っているので、一刻も早く投函しなければならない。昌弘の仕事が休みなので、宛名書きの作業を一緒にすることになっていた。

プロの業者に書いてもらうこともできるらしいが、オプション料金がかかるのでやめた。「毛筆書きで出すのが正式ですよ」と言われたが、「パソコンで筆で書いたみたいな字にすればいいよね」と断ったのだ。

ちあきは何か言いたそうだったが、パソコンで印字することの何が悪いのか優貴菜にはわからない。年賀状なんか全部そうだし、自分の字はいわゆるギャル文字だ。

「優貴菜ちゃん、いらっしゃい。あらっ、重そうねえ！招待状ってそんな大きな荷物だったの？昌弘に迎えに行かせたらよかったわね」

玄関で迎えてくれた昌弘の母親が、いつものように怒涛の勢いで喋りだした。「つわりはどう？冷たい飲み物がいいって聞いたから、ジュースとかいろいろ買っておいたんだけど。オレンジジュースとグレープジュースとサイダーとどれがいい？」

「あ、お茶で……」

「お茶なの？あらそう。じゃあ麦茶で大丈夫？私の時はねえ、炭酸の飲み物しか飲めなくって、サイダーばっかり飲んでたわ～。それで、なぜかパイナップルがおいしくって！パイナップルで生きてるようなものだったから、昌弘はパイナップルでできてるのよ～」

驚くほど饒舌なこの母親が優貴菜は嫌いではない。おっとりした自分の母とは全く違ったタイプだが、聞いていると面白いし話題に困らないから楽だ。ちなみに、母親がこの調子なので、昌弘の父や兄、昌弘自身もおしなべて穏やかで口数少ないタイプである。

数週間前に突然、妊娠しましたから結婚します、と連れてこられ

た優貴菜を、この家の家族は拍子抜けするほど歓迎ムードで受け入れてくれた。
お兄ちゃん、昌弘に先越されちゃったわねーと母親が言い、ひとしきり家族で笑った後、
「優貴菜ちゃん、結婚したら嫌でなければうちに越していらっしゃいよ。赤ちゃんが生まれたら何かと大変だし、うちの昌弘の稼ぎだけじゃ大したところ住めないでしょ？しばらく貯金して、落ち着いたらおうち探したらいいじゃない」
と言ってくれた。
ドラマに出てくるような『シュートメ』とは全然違って安心したものだ。
「優貴菜、おつかれー。体調どう？」
二階の部屋から昌弘が降りてきた。朝もメールで体調はと聞かれていたので二度目だ。優貴菜は一度目と同じように「いつもとおんなじくらい」と答えた。つわりが始まって以来、体調がいい日などない。
「そっか。印刷とか、俺がやるから優貴菜は座ってな。これが招待状？」
「うん」
「結構デケー箱だなー。言ってくれれば俺がホテルに取りに行ったのに」
「ユキナもこんなにおっきいなんて知らなかったもん」
優貴菜はお言葉に甘えてソファにもたれかかり、昌弘の母親が持ってきてくれた冷たいお茶に口をつけた。
昌弘がその横でノートパソコンを開き、宛名書きのソフトを立ち上げる。
「優貴菜の送ってくれた住所のデータ、うちのソフトで取り込めたから設定さえできればすぐ印刷できるよ」
「ふーん」
そう言われても、データを整理して送ったのは父親なので優貴菜

はよくわからない。
　昌弘は招待状の箱を開け、封筒を取り出して大きさを測り始めた。昌弘の母親は、「優貴菜ちゃんフルーツなら食べられる？」と言いながら、皿に盛ったブドウを出してくれた。
「昌弘に聞いたけど、昨日ドレス見に行ったんだって？写真ないの？」
「あるけど、あんまりカワイイの残ってなくってー」
　言いながら、デジカメを再生モードにして渡す。
「カワイイじゃなーい！これじゃダメなの？」写真を次々再生しながら、昌弘の母親は興奮している。「あ、こっちの方がさっきのよりもいいわ。どれ予約したの？」
「最後に着てるやつ」
「あ、これね？うんうん、カワイイわよ！優貴菜ちゃんの雰囲気に合ってる！」
　昌弘の母親がカワイイを連発してくれたので、妥協して選んだドレスだったが不満は少なくなった。やっぱこのお母さん、好きだなー。同居してもうまくやっていけそうでよかったー。
　母親は昌弘にも、「優貴菜ちゃんカワイイわよねぇ！」とカメラの画像を見せている。昌弘は作業の手を止めて、「うん、似合ってる。へこまなくて大丈夫だよ優貴菜」と、優貴菜の目を見て言ってくれた。
「マサくんがそう言うならそのドレスに決めよっかな」
「いいよ、優貴菜の好きなやつで。これでもいいけど、また行くんだろ？試着」
「うん、でも次はお色直しのドレス見に行くの。昨日そこまで見れなかったから」
　昨日は時間もかかり、気分も悪くなってきたので白のウエディングドレスしか見れなかったからカラードレスは来週だ。白のドレスもまだ見たかったが、そんなに悠長に悩んでる暇はない。
　昨日は家で、父親も、弟も褒めてくれたし、これでいいかな～と

いう気持ちになった。
「そっか。ごめんな、一緒に行けなくて」
休みの日は打ち合わせや作業に当てるため、試着までは付き合えない昌弘である。
「式の直前は有給とっていいって、社長が言ってくれてるから」
優貴菜と昌弘は、同じ会社だった。優貴菜は入社前の研修で出会った昌弘と付き合いだして、妊娠が判明してすぐつわりで出社できなくなり退職を決めたので、ほとんど勤めていないが。
「社長にスピーチ頼んでくれた？」
「うん。任せとけって言ってた。優貴菜の体調心配してたよ」
小さな会社なので、社長といっても身近な存在だ。親戚のおじさんくらいに親しく感じられる気さくな社長で、二人の結婚も妊娠も祝福してくれた。
「いい社長さんで良かったわね～。会社の人はみんな呼ぶの？」
「一応みんなに招待状は渡すけど、何人か留守番役で欠席になると思う」
「あらら、残念ねえ！」
昌弘と母親の会話を聞きながら、優貴菜はブドウに手を伸ばした。よく冷えたブドウはおいしかった。優貴菜は吐きづわりなので食欲は常になかったが、これなら食べられそうだ。
考えることがたくさんあるが、頭がうまく働かない。とりあえず招待状は昌弘に任せれば大丈夫そうなので、優貴菜はソファにさらに深く体を沈めた。

12w4d

その日は昌弘の両親と、優貴菜の両親とで、揃ってモーニングと留袖の試着に来ていた。
優貴菜のドレスは先週決まった。最初は選べる数が少ないことが不満だったが、試着してみるとやっぱりテンションが上がったし、モデルのプロデュースしているドレスのようなゴージャスさはないものの、こーいうのもカワイイじゃんと思えるようになっていた。
サイズはまだゆったりめだ。直前にもう一度サイズ合わせに来る予定で、万一のために15号のドレスも予備で選んだ。
今日は両家の両親が試着がてら、ホテルも見学することになっている。昌弘は仕事で欠席だ。
「奥さん、そのお着物、素敵な柄だわ〜！華やかだからお若く見えるみたい！」
「そうかしら…？優貴ちゃん、どう？」
母親同士がキャッキャ声をあげながら、留袖を選んでいる。意見を聞かれた優貴菜は、「いいと思うよ」と答えておいたが、正直留袖のデザインの違いは良くわからない。
先にモーニングを選び終えている両家の父親もそれは同じなようで、二人とも愛想笑いを浮かべながら一歩引いて見学していた。
「お嬢さんがいると、いいですな。ドレス姿が楽しみでしょう」
「まあ、そうですね……こんなに早く見るとは思いませんでしたが」
「若くて綺麗だから何でも似合うでしょうねえ。うちは男二人だから、優貴菜ちゃんが来てくれるのを楽しみにしてまして」
手持ち無沙汰に言葉を交わしているが、会話の内容は正直、微妙だ。何となく優貴菜の父親が不満そうに思えなくもない。
妊娠を告げた時、母親は驚きながらも「優貴ちゃんが産みたいなら協力する」と言ってくれたが、父親は黙って寝室に消え、一日出てこなかった。

次の日になって、ひどくぶっきらぼうな調子で「本当にいいんだな？」と聞かれた。
うん大丈夫、と答えると、「ならいい」とだけ言って、それからは昌弘の挨拶も両家の顔合わせも淡々とこなしている。招待状の住所録の整理を手伝ってくれたり、ドレスについて意見を言ってくれたりとむしろ協力的だ。
優貴菜としては、普段厳しい父親にはてっきり怒られると思っていたので、父親の真意が読めずに宙ぶらりんな気持ちのままだった。
思わず会話に耳を澄ましてしまう。
「息子さんには礼服を？」
「そうですね、この機会にあつらえさせようかと」
「でしたらうちも、上の息子は礼服で出席させましょう」
どうやら着る物を両家でそろえる相談をしているようだ。無難な会話になったことにほっとしながら、優貴菜はそっと横目で父親の表情を伺い見ていた。

「こちらが、式場のチャペルでございます」
両親の衣裳選びを終えてホテルに移動し、ちあきを紹介した。あらかじめアポイントを取っていたので、ちあきはすぐに現れて如才なく挨拶をし、両親に名刺を渡した。
ちあきの案内で、披露宴会場とチャペルを両親に見せる。相変わらず、両家の母親が（特に、昌弘の母親が）きゃあきゃあと歓声を上げ、他愛無い質問をしている。
「バージンロードは２０メートルの長さがありますので、ドレスのトレーンもぐっと映えます。何より、お父様との時間をじっくりと味わっていただけますよ」
ちあきが笑顔を優貴菜の父親に向けた。
ああ、と初めて気がついたように、父親は目を瞬かせた。「私も

出番が有るんですね……」
「ええ……優貴菜さん、お父様とのご入場ですよね？」
あわてたようにちあきが優貴菜を振り返る。
「ハイ。そうじゃないことってあるんですか？」
優貴菜としては当然、父親との入場のつもりだ。というか、それしかないと思っていたので、特に父親に確認はしていなかった。
「ええ、時々」ほっとした様子のちあきが説明してくれた。「必ずお父様だと決まっているわけではないんです。お父様がおられない場合もありますから」
なるほど、当然死別や離別もあるだろう。優貴菜は父親を見た。
「パパ、よろしくね」
「……ああ」
気のせいか目線をそらしつつ頷く父親を見て、何となく気持ちが沈んだ。
パパは、ユキナの結婚うれしくないのかな。できちゃった婚だから嫌なのかな。でも、だったら何か言ってくれたらいいのに。
小さなころから父親に目いっぱいかわいがられてきた優貴菜は、父親が感情を見せてくれないことが悲しかった。いつもなら叱るときは厳しく叱ってくれるのに、何も言ってくれなければ謝ることもできない。
「優貴菜さん？しんどいですか？」
気付くと、ちあきがそばに来て顔をのぞきこんでいた。うつむいてしまっていた顔を上げ、「大丈夫です」と言った。つわりはここ数日少し落ち着いている。
「ご両親へサプライズの演出もいろいろあるんですよ。今度のお打ち合わせでご相談しましょうね」
小声でささやいて、また両親たちの相手に戻っていくちあきは、まだ数回しか会っていないがやっぱり頼りになると思った。

13w5d

「……なーんか、不安なのよねえ」
事務所の自分の席で、打ち合わせ書類を見ながらちあきは呟いた。
「え、何？例の若い新郎新婦？」
隣の席の未来が聞き返す。「今打ち合わせしてるんでしょ？」
「うん、今花屋」会場装花の打ち合わせにフラワーコーディネーターを呼んだので、今は待ち時間だ。書類に決まった内容を書き込みながら、ちあきは未来に答える。
「何かさあ、危なっかしいって言うか……あたしが勧めるもの、何でも『じゃあそれで』って感じだし、デザイン選ぶ時は『これカワイイ』で決定だし。良くわかってないんじゃないかって、ひやひやしちゃう」
「仕方ないよ、若いんだもん。結婚式も出たことないんじゃない？」
「うん、二人ともないって言ってた」
「基準がないんだよ、あの子の結婚式より豪華にする！みたいな」
「そっか、そうかもね」
未来に相槌を打ちながら、ちあきは小さく首をかしげる。
それだけじゃない気がするんだけど。
若いカップルはこれまでにも担当したことがある。結婚式というものを良くわかっていないのは同じだったが、もっと希望や夢を持っていて、積極的だった。
これまでは、つわりのせいかと思っていたが。
「地に足が着いてないんだよなぁ」
ちあきが不安なのは、あの二人があまり深く考えていないように見えることだ。イマドキの若者なのかもしれないが、何につけても、軽い。契約も即決だったし、打ち合わせもスイスイ進む。ドレスだけは、予想通り在庫の少なさに落胆していたと聞いたが、今聞くとそれなりに満足するものが選べたようだ。

両家の親にも会ったが、付き合ってすぐの授かり婚にしては親が鷹揚としていて、拍子抜けした。優貴菜の父親だけは少しわだかまりがありそうだったが、娘を嫁に出す父親とは総じてそんなものだ。スムーズすぎるのだ。何もかも。

親も反対していない。お金も出してくれるらしい。聞くと、特にうるさい親戚もなく、会社関係も気を遣う必要がないという。

あの二人の結婚には障害が何もない。

イヤ、障害が必ずあるとも限らないし、ないに越したことはないのだが……このまま結婚して大丈夫かしらと、心配してしまう自分はオバサンだろうか。

親との関係に悩み、親戚の目を気にして、会社関係の席順に悩み……準備に協力しない新郎と喧嘩して、ほとんど泣きながらちあきに電話をしてくる新婦もいる。そうやって紆余曲折しながら結婚式を迎えて、達成感と充実感で二人の絆が強くなるカップルをたくさん見ている。

そんな悩みを優貴菜には全く感じない。

昌弘は終始優しく、都合がつく限り協力してくれているいい新郎だ。しかし、あの二人はじっくりこれからのことを話せているだろうか。

「……おせっかいはやめよう。結婚式をつつがなく挙行するのがあたしの仕事だ」

上司に口すっぱく言われている文句を呟いて、ちあきは作業に戻った。

あの二人が深く考えないまま結婚するのだとしても、自分にできることは何もない。

……しかし、結局ちあきは小さなおせっかいをしてしまった。

「ご両親へのプレゼント、何かお考えですか？」

「え……普通は何か考えるんですか？」
二人は不思議そうにちあきを見た。「花束とか？」
「ええ、花束を差し上げられる方が多いですよ。でも、最近はオリジナルのプレゼントが人気なんです。生まれたときの体重のお人形なんかもありますし」
「あ、それは知ってる！雑誌で見たことある」
優貴菜が食いついた。「くまのぬいぐるみでしょ？かわいかった」
「今はキャラクターのものなどもいろいろあるんですよ」
すかさずパンフレットを出して、近くの棚からサンプルを取り出す。
「あ、モッフィーだ！」
絵本などで人気のキャラクターに優貴菜のテンションが上がる。ちあきは優貴菜に、そのぬいぐるみを抱かせた。
「わ、結構重い！赤ちゃんってこんな重いの？」
「そうですね。親御さんは生まれたときの重さを思い出して、感動されるようですよ」
昌弘もぬいぐるみを抱き取って、感慨深そうだ。
しかし、ちあきの本命はこれではなかった。
「もっと感動を呼ぶアイテムとして、お二人の生い立ちムービーというのもあります」
高価だが人気の高い商品だ。最近の結婚式ではほとんど使われているが、列席経験のない二人はぴんと来ない様子でちあきを見た。
そこに用意していたポータブルＤＶＤプレーヤーを出す。
「サンプルです。ご覧になってみてください」
費用が親もちの二人は、予算は気にしない。必ず気に入るという確信があった。

結果、生い立ちムービーと体重のぬいぐるみの注文を受けて、そ

の日の打ち合わせは終わった。

13w6d

順調だった打ち合わせの次の日。

「優貴菜、やばい！社長が怒ってて、結婚式に出ないって」

昌弘がめずらしく昼間に電話をよこし、慌てた声でそう言った。

優貴菜は唖然とした。

「どおしてぇ！？祝福してくれてるって……」

「わからない。今日、招待状渡したら、急に……」

「今日！？」

優貴菜は思わず声を荒げた。招待状は3週間も前に投函を済ませている。主賓には手渡し、というちあきの指導で、社長への招待状は昌弘が持っていたはずだ。

本来は、招待状は結婚式の2ヶ月前に発送。1ヶ月前が締め切りです。ですが、お二人の場合もう2ヶ月前は過ぎてしまうので、とにかくできるだけ早く出しましょう。締め切りは、少し遅めに結婚式の3週間前。集計が大変になりますが、がんばりましょう。

招待状を作った時に、ちあきに説明された内容が頭をぐるぐると回る。

招待状は、結婚式のおもてなしの第一歩です。招待状を受け取った印象が、結婚式の第一印象です。手元に届くのが遅かったり、返事を急がされたりしたらあまり気分が良くないですよね？結婚式に「来ていただきたい」という気持ちで、丁寧に、迅速に。

あ、主賓の方には特に注意してくださいね。まず、口頭で出席と祝辞のお願いをした上で、招待状はできれば手渡しなさってください。

「なんか、社長ずっと出張とか外出とかで、会えなかったんだよ……前に日時は伝えてあるし、スピーチも了解もらってるから、大丈夫だと思って」
昌弘は聞いたことないような声でおろおろと言い訳している。最近までつわりで頭が働かず、昌弘に確認しなかった自分も悪いが……まさか今日まで渡してないなんて。締め切りは一週間後だ。
ちあきの説明を聞いただけの優貴菜にも、昌弘が決定的に失礼なことをしたらしいことは分かった。
「どうしよう優貴菜……」
そんなこと言われても、会社を辞めている優貴菜にはどうすることもできない。
頼りになると思っていた昌弘の、思わぬ頼りなさに優貴菜は絶望的な気持ちになった。
「とにかく、謝ってよ！ユキナ安野さんに相談しとくから！」
昌弘の返事も聞かずに電話を切り、すぐにホテルの番号を発信した。
事態の急変に耳元で心臓がばくばくしている。保留の音楽がもどかしかった。
こんなに動揺したらおなかの赤ちゃんに悪いかも。と、頭の隅で考えた。

「あんたって子は！どうしてそんなにいい加減なの！」
その夜、相談のために優貴菜は昌弘の家に来ていた。帰宅した昌弘に開口一番、昌弘の母親の怒声が飛んだ。
「だって……」
「だってじゃない！まずは謝りなさい！」
昌弘の母親は優貴菜と、一緒に来ている優貴菜の両親を振り返った。

「教育が行き届かず申し訳ありません……！」
「奥さん、奥さんにはもう十分謝っていただきましたから」
優貴菜の父親が制した。実際この家に着いた時から昌弘の母親は謝り通しだ。
「どうもすみません……」
「昌弘くん」
母親の後ろでばつが悪そうに謝った昌弘に、優貴菜の父親は静かに声をかける。
「君には失望した」
「……！」
昌弘が撃たれたような表情になる。
「親御さんの前で申し訳ない。私の正直な気持ちをお話してよろしいですか」
「もちろんです。お好きに言ってやってください」
昌弘の両親に断りを入れ、優貴菜の父親は静かな口調のまま続けた。
「私がどうして君と優貴菜との結婚を許したか、分かるか」
優貴菜は驚いて父親を仰ぎ見る。
「22歳という若さで、君が大人としてまだ未熟なことは、初めてうちに来てくれたときから分かった。そんな君との、順序が逆になった結婚を、どうして許したか分かるか」
優貴菜の鼓動が早くなる。父親の表情は読めない。
子どものためですか、と昌弘が消えそうな声で聞いた。
「もちろんそうだ。だが少し言葉が足りない」静かな、しかし強い言葉が続いた。「今、優貴菜のお腹にいる子どもは、私と妻にとっての優貴菜だからだ」
少し、間が空いた。
優貴菜にはよくわからない。昌弘もそうらしく、目線が懸命に説明を求めていた。
その目線を確認するようにしばらく見返した後、父親は再び口を

開いた。
「君は若い。優貴菜もだが。社会人としての経験も足りない。そんな未熟者がかわいい娘と結婚なんて、5年後に出直して来いと叩き出したいところだ。たった数ヶ月の付き合いで、優貴菜の何が分かる。おまけに順序が逆だ。子どもが子どもを育てられるのか。どこにも許す理由などない」
昌弘が、ぶつけられる言葉ひとつひとつに傷つきながらも、必死に受け止めようとしていることがその表情で窺い知れた。
そんな昌弘を見ながら、優貴菜は息をつめて父親の言葉を待った。
「……しかし、だ」
重い重いため息をついて、優貴菜の父親は言葉を絞り出した。
「今、優貴菜のお腹にいる子どもは、君と優貴菜の間にできた初めての子だ。私と妻の間にできた初めての子は、優貴菜だった。
結婚を許さなければ、お腹の子は父親がいないことになる。そんなことはできない。中絶はもっとありえない。それは、私にとって優貴菜をそんな目にあわせるのと同じことだ。……選択肢はひとつしかなかった」
優貴菜は思わず、自分のお腹に手を当てていた。ここのところ、ふくらみが目立ち始めたそこに、昌弘と自分の子どもが、いるのだ。両親にとっての優貴菜のような存在が。
今、はじめて自覚した。
「私には許すことしかできない。だから、君にも選択肢はひとつしかない。優貴菜と、お腹の子のために全力を尽くすことだ」
父親の目が潤んでいることに優貴菜は気付いた。その気持ちは悔しさか、無念さか。昌弘に、頼むから裏切ってくれるなとその目が訴えかけている。
「私には君を信じることしかできない。頼む」
「……俺」昌弘が姿勢を正して口を開いた。「明日、朝一番で会社に行って社長に謝ります。土下座でも何でもします。全力で謝って、何とかします」

すごいな、と優貴菜は思った。
昌弘は誠実だ。それは優しいというだけでなく、自分の未熟さを正面から受け止めることのできる強さを持っている。
好きだな、と思った。
楽観的なところが玉に瑕だが、今日初めて知る昌弘の本質を見て、この人が好きだな、と思った。

14w0d

昌弘の家を辞したのは日付も変わった頃だった。
父親の運転する車の後部座席に乗り込み、優貴菜は言った。
「パパ、ありがとうね」
「……何がだ？」
「何か、いろいろ」
たくさんのことが起こりすぎて、めまぐるしい一日だった。
けれど分かったことがある。
「ユキナ、パパのことがすごーく好き。パパがユキナのパパでよかった」
「何言ってるんだ」
運転中で後ろを向けない父親の耳が赤くなった。
「パパ、超カッコよかった。……マサくんもちょっとカッコよかった」
父親から返事はなかった。
優貴菜は気にせず続ける。
「ユキナ、マサくんがこの子のパパでよかったって思った。ちょっと頼りないけど、がんばってくれるところが好き。だから、きっと大丈夫だよ」
お腹のふくらみを撫でながら、優貴菜は満ち足りた気持ちでつぶやいた。
「きっとこの子も、マサくんが大好きになるよ。ユキナみたいに」
「……だったらいいけどな」
「でもまあ、社長さんが許してくれたらいいわねえ」
空気を読まないタイミングで母親がのんびりと口を開いた。
「あなたも、ほら、あったわねぇ。結婚式の時。会社の方のお名前が一人抜けてて、当日大変だったじゃない？」
「馬鹿、お前、」

車の動きがぶれた。優貴菜は慌てて扉をつかむ。
「余計なことを思い出さなくていい！」
「どうして？私、やっぱり優貴ちゃんはパパと似た人を選ぶんだわーと思って、おかしくて。あなたも私の父に怒られて、小さくなってたわよねえ」
「そんなことは覚えてない！」
慌てた父親を見るのは珍しい。優貴菜は声をあげて笑った。

朝起きて、優貴菜は昌弘に「おはょ。今日社長がんばって」とメールを打った。
昌弘の返事はなかったので、もう会社で待ち構えているのかもしれない。
ひとまず優貴菜は自分のできることをしようと思い、押入れから何冊もアルバムを抜き出してきた。結婚式で流すことになった生い立ちムービーを作るために、写真が必要なのだ。
「うわーちっちゃい」
思わず声をあげたのは、『ゆきなちゃんのおいたち』と刺繍の入った分厚い表紙をめくった
一ページ目の写真だった。
病院のベッドだろうか。寝巻き姿の母親が、赤ん坊を抱いて微笑んでいる。
『２７８０gですこし小さく誕生しました。病院にいる赤ちゃんの中でいちばんの美人さんです』
母親の字でコメントが一緒に貼られていた。
退院の日、病院の前での写真。祖父母も一緒の命名式の写真。一枚一枚に幸せそうに微笑む母親と、小さな赤ん坊が写っていて、父親がめったに登場しないのはカメラ係だったのだろう。少しずつ大きくなる様子が細かく写され、丁寧にコメントがついている。

『はじめて笑ってくれました！ますますかわいくてお父さんもメロメロです』
『ガラガラをはじめて握ってくれました。たくさんおもちゃを買ってあげなきゃ』
分厚いアルバムは1歳になるまでの一年の写真で埋まってしまっていた。少し表紙がシンプルになった二冊目をめくると、続きの写真がまた同じように貼られている。
『あんよができるようになりました。かわいいお靴を買おうね』
『動物園のお猿さんを見て、泣いてしまいました』
『弟が誕生。優しいお姉ちゃんになってね』
いつの間にか優貴菜の目は潤んでしまった。数え切れない写真の中に、愛されて愛されて育った自分がいる。シャッターを切る父親も、アルバムにコメントを書き込む母親も、こんなにも自分を慈しんでくれたのだ。この頃からずっと、今でも。

今、優貴菜のお腹にいる子どもは、私と妻にとっての優貴菜だからだ。

昨晩の父親の言葉が耳によみがえった。
自分は、両親のようにできるだろうか。今まさに優貴菜の中で育っている命を、慈しみ育てることが本当にできるのだろうか。
好きで妊娠したんじゃないのに、と不満に思ったこともある。
罪悪感で胸が痛んだ。思わず腹のふくらみに手を置いた時、携帯が鳴った。
「優貴菜！社長、何とか許してくれたよ！」
昌弘の声が耳に飛び込んできた瞬間、優貴菜はうわあん、と泣き声をあげた。
「いやだぁ……」
「優貴菜？何がだよ。怒られたけど、何とか許してもらえたって」
「結婚するの、いやだぁ」

昌弘はわけが分からないだろう。でも止まらない。
「怖いよぉ。ユキナ、できない……ママになんてなれないよお」
「優貴菜」
「いやだ、結婚しない！」
わあん、わあんと抑えきれない声をあげて泣く優貴菜に、電話の向こうで昌弘はしばらく黙りこくっていた。しばらくそうしていた。
そして、優貴菜の声が弱弱しくなってきた時に、ぼそりとささやいた。
「優貴菜、俺……いい加減だし、頼りないけど、優貴菜と結婚したいよ」
思わず泣き声が止まった。代わりにしゃっくりが出た。
「子どもができたから今結婚ってなってるけど、会社で初めて会ったときから優貴菜が好きだった。めちゃくちゃかわいい、俺のものにしたいって思ったんだよ」
時ならぬ告白に、優貴菜はしゃっくりをしながら息をつめた。
思えば、付き合い始めた時も、結婚を決めた時も、「じゃあ付き合う？」「じゃあ、結婚する？」と優貴菜に結論を預けていた昌弘だったのだ。
「ちゃんと言えてなかったけど、しかもこんなかっこ悪い失敗の後だけど、俺とじゃ不安かもしれないけど、俺は優貴菜と結婚したい。子どものパパとママになりたい」
優貴菜が聞いたことのない強い声だった。
自分はこの人のことをまだ全然知らないのだと優貴菜は思った。
最初はかっこよくて優しい先輩だと思った。付き合うと、いつも穏やかでワガママを聞いてくれるいい彼氏だった。妊娠を告げた時はひどく戸惑った様子で、小さく失望した。
「優貴菜が嫌なら、結婚しなくていい。もう入籍してるけど、離婚していいよ。子どもも、産むのは俺じゃ無理だけど、俺が育てるよ。優貴菜は産んでくれるだけでいいよ」
きっと昌弘は、優貴菜よりも事の重大さが分かっていたのだと思

う。
結婚して親になる責任をちゃんと理解していたから戸惑い、そしてすでに覚悟を決めているのだ。
父親になる覚悟を。
「もし、嫌じゃないなら。俺と結婚してください。俺と、子どもの親になってください。今までちゃんと言えてなくてごめん。俺まだまだ頼りないけど、優貴菜と一緒にがんばりたいんだ」
やっぱり昌弘は誠実だと優貴菜は思った。
いつの間にかしゃっくりも止まっていた。
「……うん。ごめんねマサくん。マサくんが嫌なんじゃないんだよ」
「わかってる」
「ユキナ、パパとママみたいにできるかなって不安になったの。この子のこと、ちゃんと育てられるかな」
「俺も不安だよ。でも、二人でがんばればきっと大丈夫だよ。うちの家族もいるし、優貴菜の家族もいるし」
「ユキナのお腹に来て、幸せかな」
「それは絶対」昌弘の声がまた強くなる。「優貴菜がママで幸せだよ。優貴菜はお義父さんとお義母さんにたくさん愛されて育ったってすぐわかる。そんな優貴菜が子どもをかわいがれないわけないよ」
優貴菜はやっと小さく笑った。
ママはまだちょっと泣き虫だけど、あなたのパパはかっこいいよ。と、心で子どもに語りかけた。

エピローグ～6月25日

「……というわけで、新郎の昌弘君は積極的でまっすぐな若者であり、まだまだ一人前とは言えませんが我々としては将来性に大変期待するものです」

主賓の挨拶を終えて、そのまま社長が乾杯の音頭を取った。

その挨拶の内容が多少、棘を感じるものだったのはご愛嬌だ。

「あの社長でしょ。新郎が締切一週間前まで招待状渡してなかった主賓って」

ちあきと並んで披露宴を見守っていた（という名目で見物に来た）守屋未来が、耳打ちする。「よく許してくれたねぇ。嫌味はちょこちょこはさんでたけど」

「ホント、ほっとしたわ」

優貴菜から主賓を怒らせたと相談の電話があったときは、肝を冷やしたものだった。招待客に対してのフォローは本人たちにしかできない。とにかく謝罪と、出席のお願いを何とか、としか言えなかったが、案外あっさりと許してくれたらしい。いい会社なんだろうなとちあきは思った。

何よりもそのトラブルの後、二人の雰囲気が一変した。

どこがどうとは言えないが、ようやく『結婚するカップル』に見えたものだ。

歓談の時間となり招待客に囲まれた高砂席で、昌弘と優貴菜は照れくさそうに、幸せそうに微笑んでいる。

この表情を見ることができると、ああ一仕事終わったな、と思う。

そして、やっぱり結婚式っていいな、と毎回思うのだった。

披露宴も終わりに近づき、会場キャプテンが二人を高砂席から少

し離れた席へと誘(いざな)った。
「さて、ここまで皆様と楽しく、和やかに過ごしてまいりましたこのご披露宴も、そろそろお開きが近づいてまいりました。本日はお二人の新しい生活のスタートの日であるとともに、末席にいらっしゃるお父様、お母様にとってはゴールとも感じられる特別な一日であったのではないでしょうか」
司会者がしっとりとした声音で切り出し、会場の照明がゆっくりと落とされる。
高砂席の後ろに、大きなスクリーンが下りてきた。
「最後に皆様のお時間をお借りして、新郎新婦お二人よりご両親へ、感謝のお言葉を伝えていただきます。それに先立ちまして、お二人のこれまでのご両親との時間を、映像で振り返っていただきましょう」
生い立ちムービーの再生が始まった。
昌弘と優貴菜の、生まれたときからの写真がゆっくりと順番に現れる。
昌弘の写真も優貴菜のものと同じように、愛されて育った様子が手に取るように伝わった。
「マサくん、ちっちゃい。かわいい」
「優貴菜も」
小声で囁きあって小さく微笑んだ。
暗闇の中目を凝らすと、一番後ろの席で昌弘の母が目元にハンカチを当てていた。
映像のＢＧＭは二人で選んだ定番の曲だ。あなたに会えてよかった、誰よりも大事な宝物、と歌われる詞にあちこちで招待客が鼻をすする音が重なった。
やがて、映像が終わり、昌弘と優貴菜にスポットが当たる。
「今まで育ててくれたご両親との時間は、これから新しい家庭を築かれるお二人にとっての指針となることでしょう。言葉に尽くせぬ思いを、お手紙にしていただきました。新婦・優貴菜さんからご両

親へ、感謝のお手紙です」
昌弘がマイクを優貴菜の口元に向けてくれる。優貴菜はくぅっと締まったのどの奥から、一生懸命に声を絞り出した。
「パパ、ママ」
会場の後ろに立っている両親は、なんだかいつもより小さく見えた。
「20年間、育ててくれて、ありがとう。
今まで、パパが叱ってくれることも、ママがごはんを作ってくれることも、当たり前のことだと思っていました。でも、自分に子どもができて、これまでパパとママがユキナにしてくれたように育ててあげたいと考えた時、それがとってもすごいことだったんだと気付きました」
胸が詰まって声が出なくなった。昌弘が背中に手を当ててくれた。
会場から、誰かがガンバレ、と声をあげてくれた。
「パパとママと同じようにできるかはわからないけど、二人みたいになれるようにマサくんと一緒にがんばっていきたいと思います。でも、まだまだパパとママに甘えたいので、大変な時は助けてください。マサくんのお父さん、お母さんも、これからたくさん助けてもらうことになると思うので、どうかよろしくお願いします」
会場スタッフが手渡してくれたぬいぐるみを手にして、二人はゆっくりと歩き出した。
お二人が生まれたときの体重のぬいぐるみです、と司会者が説明をしている。
両親に手渡すと、会場が拍手に包まれる。
ふいに優貴菜はガバッと抱きすくめられた。見ると父親が泣きながら優貴菜を抱きしめていた。
父親の涙を見たのはチャペルのバージンロードに続いて二度目だ。
会場の拍手がますます大きくなった。
ふと。違和感を感じて、優貴菜は父親から体を離した。
「……動いた。かも」

ドレスの上からお腹に手を当ててつぶやく。父親と母親と昌弘が、同時に「えっ」と声をあげた。しかし会場スタッフに問答無用で一列に並ばされて、「それでは最後に両家を代表して、新郎の昌弘さんよりご挨拶です」と司会者に振られて、昌弘は優貴菜を気にしながらもマイクに向かって喋りだす。

内臓がぎゅるっと動いたような感覚がした。

初めての感覚。

優貴菜はうれしくなった。いるんだ。ちゃんと、ここに。

さっきまで泣きながら手紙を読んでいたとは思えないほど、顔がにやけた。

「……まだまだ未熟な二人ですので、皆様にはご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。本日は、」

昌弘が何とか無難な挨拶を終えようとしている。優貴菜はがまんできなくなって、昌弘の前のマイクに口を寄せて、叫んだ。

「今ベビーが初めて動きましたぁ！！」

会場からわぁっと声が上がり、昌弘と両親たちはあんぐりと口を開け、会場スタッフたちは慌てた。会場の隅でちあきがブッと吹き出したのが見えた。音響係が勢い余ったか気を利かせたか、お開きの明るいＢＧＭが大音量で流れ出した。

「どうもありがとうございましたぁ！」

優貴菜は一人満面の笑顔で明るくその場を締めた。

苦笑する両親たちと旦那様に囲まれて、会場中の笑顔と喝采と拍手に包まれて、今自分は世界一幸せだな、と思った。

エピローグ～6月25日（後書き）

第二話、『優貴菜の場合』完結です。
サブタイトルは、妊娠週数です。○w＝○週、○d＝○日です。こういう表記なんです。妊娠したことある人しかわからないタイトルですみません。
ワタシ的には生い立ちムービーはほんとにオススメの演出です♪今流行のエンドロールよりも、好きだな～。
次のお話はちあき目線が多くなる予定。モンスター新郎新婦のお話です。

36歳

大原奈緒子が杉本貴彦からプロポーズを受けた時に最初に思ったことは、「やった、勝った」だった。

36歳ともなれば、友人は8割方すでに片付いている。高望みしすぎだと言われた。結婚は妥協だとも。そんなありがたい忠告を全く聞き入れず、条件を下げない奈緒子はおそらく一生独身の負け犬まっしぐらと思われていたはずだった。

奈緒子が付き合っている相手が、奈緒子と同い年で東京の有名大学卒（誰でも名前を知っている）で、弁護士（共同経営だが、事務所持ち）の、そこそこ容姿も整った（妥協したとは誰も言わないだろう）昔で言う「三高」だと知った時も、彼女らは「そんな男がこの歳まで結婚していないのはおかしい。なにか重大な欠陥があるはずだ」と言ってゆずらなかった。が、1年付き合ってそのあたりも確認済みだ

勝った、ともう一度思った。誰か分からないけど、誰かにだ。

この歳まで待った甲斐があった。誰もがうらやむ条件の相手と、結婚するのだ。ついに！

「奈緒子？」

返事を待つ貴彦に、不安というより不審そうに呼ばれ、奈緒子は我に返った。

「……あ、ごめんなさい。うれしくて、びっくりしちゃった」

「いい返事をもらえるのかな？」

「ええ、もちろん」顔がにやけるのを必死でこらえた。貴彦には嬉しそうに頬を染めているように見えているだろうか。「こちらこそ、よろしくお願いします」

差し出された指輪を受け取って、指にはめて「ぴったり！どうしてサイズが分かったの」と喜んでみせる。過去に何回かデートの際、ジュエリーショップに寄っては無邪気を装って試着を繰り返し、店

員と会話しながら自分のサイズを連呼した甲斐があった。デザインはシンプルな立て爪で、いかにも婚約指輪なところが奈緒子の好みに合っていた。

すべて完璧。

人生で最高の誕生日だ。もうそろそろアラサーではなくアラフォーと呼ばれる微妙なお年頃である３６歳の誕生日が、こんなに幸せなのは世界で自分だけではないかと思った。

「ほんとにありがとう、貴彦さん」

にっこりと完璧な角度で微笑んだ。笑顔に嘘はない。

ただ、重ねた歳の分それをコントロールする術を身につけているだけだ。

結婚への段取りはとんとん拍子で進んだ。

奈緒子の親は反対などするはずもなく、貴彦を諸手を挙げて歓迎し、「こんな気の強いいき遅れの娘をもらってくださるなんて」と涙まで流した。貴彦の両親も穏やかな人柄で、「この歳まで仕事仕事で、私たちも気をもんでたところだったのよ」と微笑む上品な母親は奈緒子を安心させた。

会社はといえば、奈緒子は半年前すでに辞めていた。奈緒子の恋人の存在を知らない相手には婚活か、知っている相手には結婚かと噂されたが、すべてこう言ってかわした。

「１０年以上働き詰めで、疲れちゃったからちょっと休憩です。しばらく旅行にでも行って、失業保険が切れたら派遣かバイトでゆっくり働きます」

もちろん、本心は貴彦との結婚を見据えての退職だ。

貴彦にプレッシャーを与えないために、実際に女友達や家族と旅行などに行って、毎日をエンジョイしている風を見せていた。その一方で、料理教室に行ったりしてそれまで自信のなかった花嫁修業

もこっそり積んだ。
結婚を報告すると、女友達は口々に祝福してくれたが、内心は悔しがっていることが手に取るようにわかった。何しろ、つい先日までさんざん報告を聞く側だったのだ。悔しい思いをしなかったのは、仲間内でも結婚が早かったグループのひとりの離婚の報告だけである。
すべて、完璧だった。
この完璧な結婚を見せつけるためには、盛大な結婚式を挙げなければと思った。
貴彦は、仕事上呼ばなければならない相手がずいぶんたくさんいるようだ。大仰になることを申し訳なさそうに謝られたが、奈緒子にとっては願ったり叶ったりである。費用の心配はしなくていいからあとは奈緒子の好きなように選んでいいと言われれば、ますます貴彦が魅力的に見えて惚れ直したほどだった。
そうと決まれば、完璧な結婚式を挙げなければならない。
ノウハウはあった。これまで数え切れないほどの結婚式に出てきたのだ。景色はいいが駅から遠いし海風が強くてヘアセットがぼろぼろになったゲストハウス。衣裳は豪華だったが料理が貧相で、さんざん陰口をたたかれていた後輩の披露宴。そんな風にはさせない。
まず、会場はホテル。（人数の規模から言っても、これは絶対だ）交通の便が良ければ、尚良い。会場が遠いだけでゲストは不満がるものだ。有名な格式あるホテルなら、もっと良い。
さらに、料理がおいしいこと。
過去の結婚式で、近隣のホテルの味は知り尽くしている。この時点で、奈緒子の心はほとんど決まっていた。
ターミナル駅直結の、誰でも知っているホテル。料理の味は数年前に確認済み。建物は少々古いが、小娘でもあるまいしそんなことは大した問題ではない。張りぼてのお城より歴史と伝統のホスピタリティ。これぞ大人の花嫁の選択だ。
見てらっしゃいよ、とつぶやいた。ぎゃふんと言わせてやるわ。

誰にかは分からない。けど、誰かに向かって奈緒子は鼻息荒く結婚式の成功を誓った。

36歳6ヶ月

安野ちあきは最近、メールチェックが憂鬱だ。
「……やっぱり来てる」
「例の大原様？」
隣の席の同僚・守屋未来がちあきの独り言に返事をした。
「休み明けだから2通来てる」
「うわー。愛されてるわね」
「愛が重いよ～」
軽口を返しながら、メールを開く。ほとんど毎日メールをやり取りしているのに、またしてもびっちりと書き込まれたその長さにげんなりした。
「まだ半年前なのに～。打ち合わせは3ヶ月前からって何回も、何回も言ってるのに～！」
1ヶ月前に予約を取ったカップルで、結婚式は半年先だが、新婦の大原奈緒子は見学に来た時から熱心……というより非常に細かくて、ちあきはその時点で若干腰が引けていた。繰り出される質問に必死に返答しているうちに何とか合格点をもらえたらしく、契約となったわけだが……その時からほとんど毎日、3日とあけずにメールが来る。しかも、何スクロールにもわたる長～いやつだ。

安野様　いつもお世話になっております。

先日ご回答いただいた内容を読んで、また疑問が出てきましたので、お忙しいところ恐れ入りますがお手すきの際にご返答ください。
【1】見積の「衣裳小物」の費用は概算であるとのことで、その内容としてはベール・グローブ・靴などがあるというご返答でしたが、それぞれどのような種類があるのでしょう。

たとえば、ベールだとロング・ショートなどでしょうか。
種類と、それぞれのお値段を詳しく教えていただければ幸いです。
【2】ドレスショップは提携の店舗が3つあるというご返答でしたが、それぞれの特徴とドレスの数など教えていただけますか。
【3】先日、両家で話した際に、結納をホテルで行う案が出ました。プランなどあればご案内いただけますか。
【4】両親の衣裳もお借りしたいと思うのですが、種類とお値段を教えていただけますか。また、提携先でない衣裳店で借りた場合、持込料はかかりますか。

このような疑問がだいたい10問前後、毎日のように届くのだ。ちあきにとっては毎日小テストをされているような気分である。
「今日、返事する時間あるかなぁ……」
メールの返事を書くには、もちろん各部署に確認を取ったりもしなければならない。それをわかりやすく文章にまとめて、お客様に出すメールに仕上げるのには早くても30分はかかる。ちあきは文章が苦手なので、もっとかかる。
しかも、今日は別のカップルの打ち合わせが2本入っている。残業確定だ。
「確認して後日お返事します、じゃダメなの？」
未来が聞いてきた。未来も文章が苦手な仲間なので、いつもメールに四苦八苦している。時間がかかりそうな時はとりあえず「確認中です、後日返答します」は常套手段だ。
しかし。
「それやってたら、質問が50問くらいになっちゃうよ～」
奈緒子は、ちあきから返事が遅れていてもかまわず次の質問を送ってくる。しかも、返事が二日空くと「安野さんはお休みですか？」と電話までかかってくるのだ。
以前、何通か溜め込んだ挙句「お返事がいただけないので不安にな

ってしまって……」という電話を受けて肝を冷やしたちあきは、多少残業になっても、ひとつひとつ確実にこなすのが早いと悟ったのだった。

「あと半年これが続くのかな……」

悟ったとはいえ先が思いやられて、思わずちあきは遠い目になった。通常、結婚式の打ち合わせは3ヶ月前から始まる。どれだけ早くに予約をしても、それ以上早い段階では招待客が確定できないので、できることがほとんどないのだ。それまでにできることといえば、衣裳試着や招待客のリスト作り、ウエルカムボードなどのアイテム選び、引き出物の見当をつけておくことくらいである。

それらはプランナーと打ち合わせて決めるものではないので、ぶっちゃけて言えば予約してから3ヶ月前の打ち合わせ開始まで全く新郎新婦とプランナーが会わなくても問題ないのだ。だから、あまりこだわらない新郎新婦の場合、（言葉は悪いが）放ったらかしになることも少なくない。それで、準備は十分間に合うのだ。

という段取りの説明はもちろんしてあるし、メールでも再三書いているのだが、奈緒子はこだわりたいタイプの上に頭の中は結婚式のことでいっぱいらしく、毎日新たな質問が送られてくるのである。最初に見学に来た時から感じていた印象が、今は確信に変わっている。

奈緒子は、3ヶ月前の打ち合わせ開始までこまめに連絡をせず放っておいたら、確実にクレームにつながる新婦だ。

ちあきは時計を見た。打ち合わせが始まるまで、あと1時間。

「先に返事書いちゃおう！」

嫌なことは先に済ませる。ついつい仕事を溜め込んでしまっていた新人の頃に、先輩から言われた言葉を思い起こして、ちあきは猛然とパソコンに向かった。

ある日のメール【1】

大原　奈緒子様
いつも大変お世話になっております。
暑くなってまいりましたがご体調など崩されてないですか？
ご結婚式に向けて、今年の夏は日焼け対策もがんばってくださいね。

ご質問にお答えします。
＞【1】衣裳試着はできるだけ早く、とのことだったので来週に予約を入れました。所要時間は2時間程度と言われましたが、時間内に何着ほど試着可能なのでしょうか？

ドレスショップに確認を取ったところ、状況にもよりますがウエディングドレスとカラードレス合わせて5～6着程度だろうとのことです。

＞また、その場で決定しなければならないのでしょうか。

検討中のWドレスとCドレス各1着ずつ押さえていただけます。
ご決定なさるまで何度でも試着はしていただけますが、他の方が決定なさったドレスは試着もできなくなってしまうので、間を空けずに何度か行かれることをお勧めいたします。

＞【2】ドレスを着るときにはブライダルインナーというものが必要であると聞きました。これは、見積に入っているのでしょうか。

ブライダルインナーはドレスショップで販売しています。
ドレスショップで購入なさると小物料として計上させていただきますが、他の店舗でお求めになったり、お手持ちのものを使用される

ことも可能なので、現在の見積にはお入れしておりません。
ご試着に行かれる際に案内があると思いますので、ご検討くださいませ。

＞【３】色々お教えいただくうちにベールやグローブや靴、ブライダルインナーなどの費用を初めて知り、不安になってきています。衣裳関連で他に、見積に入っていないけれど発生する可能性のある費用があればご教示ください。

ドレスを着用いただくのに必ず発生する費用（ベール・靴）については当初のお見積からお入れしておりますが、先日のメールにも記載しました通り、お選びいただくデザインによっては費用が上がる場合がございます。
また、ご懸念なさっているブライダルインナーのように、ドレスショップでお求めになるか、ご自身でご用意されるかわからないものや、必ずしも使用されるとは限らないものについてはお見積にお入れしておりません。
もちろん、使用されるということならばお見積を再計算させていただきますので、いつでもお申し付けください。
他に衣裳関連では、
・アクセサリー（レンタル無料のものがありますが、本真珠のものなどは有料です。ご自身でご用意されることも可能です）
・新郎様のお色直し衣裳（現在新郎様はお色直しなしでお見積を作成しておりますが、シャツ・ベストのみのお色直しをされる方もいらっしゃいます。その場合、費用は１５，７５０円です）
・二次会への持ち出し料（二次会へドレスのまま行かれる場合、３１，５００円の持ち出し料をお願いしております。新郎様のタキシードは１５，７５０円です）
また、美容関連で
・ベール外し料（挙式の後、披露宴に向かう際ベールを外して髪形

を整える為の料金です）
・ヘアパーツ（つけ毛を使われる場合）
・新郎様のお色直し料（美容師がお手伝いする場合。ご自身でお着替えされることも可能です）
などの料金が発生する可能性がございます。
詳細はドレス決定後、小物合わせ、美容打ち合わせにて内容をお決めいただきます。内容によって料金が大きく変わりますので、現時点ではお見積にお入れしておりません。
ご希望の内容を含んでお見積をお作りすることもできますので、ご希望でしたらお申し付けくださいませ。

＞【４】披露宴なのですが、友人に余興などをあまり頼みたくありません。その場合、時間が空いてしまうでしょうか？何か良い演出があれば教えていただけますか。

スピーチや余興などがなくても、お食事・歓談でゆったりと時間が過ごせるのでご心配はないですよ。
進行にメリハリをつけたい場合は、お二人のお写真を使った生い立ちムービーを流すのもお勧めです。（何種類かありますが、５２，５００～１２６，０００円の商品がございます）
また、ゲストの方に楽しんでいただきたいということなら、プロの楽器演奏の演出もございます。コンサートに来たような気分で過ごしていただけて、お勧めです。
ピアノソロやバイオリンなど、いろいろな種類があるので資料を添付いたします。ご検討くださいませ。

＞【５】先日、食物アレルギーのあるゲストには個別に対応していただけると教えていただきましたが、招待状の返信はがきにアレルギーがあれば書いてくださいと文言を付け加えることはできるでしょうか。

ご対応は可能ですが、別途料金が必要となります。（印刷料３，１５０円）
招待状のお打ち合わせの際、お申し付けくださいませ。

＞【６】アレルギーの個別対応についてですが、同じ料金の別の料理を出していただけるという理解で良いでしょうか。

左様でございます。

＞【７】別の料理をお願いする場合、その内容は事前に教えていただけますか。

メニュー決定はご結婚式一週間前と直前にはなりますが、ご希望があればお知らせいたします。

＞【８】また、メニュー表は別に作成していただけるのでしょうか。

１枚単位でのメニュー表印刷はいたしかねますので、メニュー表は皆様と同じものを置かせていただいております。
お料理をお出しする前に必ず、ご本人様に確認は取らせていただいております。

＞【９】当日の料理を、私たち二人の分は披露宴終了後に控え室でいただくということはできるのでしょうか。友人の式の際、そのようにしてもらったと聞いたのですが。

大変申し訳ございませんが、当ホテルではそのようなご対応はさせていただいておりません。
食中毒防止のため、ご提供させていただくお料理のお取り置きやお

持ち帰りなどを一切お断りさせていただいております。ご了承くださいませ。

長文になりまして申し訳ございません。
お分り辛い点がございましたら、おっしゃってくださいね。
また、ご不明な点がございましたらご連絡くださいませ。

尚、明日は休んでおります。
もしご連絡をいただくことがありましたら、明後日以降のご返答になりますこと、ご了承くださいませ。
別のスタッフで分かることでしたら、お気軽にお電話ください。
よろしくお願いいたします。

安野ちあき

36歳7ヶ月　1

ちあきがある日出勤すると、デスクにメモがあった。

【11／3挙式　新婦大原様よりTELあり　折り返しお電話ください】

無意識にため息が漏れる。

きっとメールも来ているだろうから、確認してから折り返そう。そう思いながら、他のメモも確認する。と、その中にドレスショップの福井亜矢からの折り返し要請のメモを見つける。

これか、と直感した。

短縮番号でドレスショップに電話をかける。亜矢はすぐに捕まった。

「安野さん、11月3日の大原様なんだけど……昨日試着に来られて……」

「どうだった！？」

「プラン外ドレスの除外料の説明したら、聞いてないっておっしゃって……」

肩に重石を乗せられた気分になった。

結婚式の料金にはパックプランというものがある。必要なものをある程度ひとまとめにして〇万円、というものだ。このホテルで用意しているパックプランの場合、ドレスレンタルの費用もここに含まれる。

ただし、ドレスにはパックプランに含まれる料金で選べるものと、除外料のかかるものとがある。たしか見学の時に説明したはずだったが、メールでは聞かれていないので答えていない。…つまり、説明したという証拠が残っていない。

亜矢が謝罪して改めて説明すると、一応納得したということだったが。

「ぜったい納得してないいいい〜〜〜〜〜〜」

電話を切った後メールを確認して、思わずうなる。
いつにも増して長い長いメールに、「除外費がかかるというのは初めて聞くことで、どうして見積もりに入れてくれていないのか」「またこのようなことがあるのではないかと不安になる」という内容がつらつらと書き連ねてあった。
やっちゃった、と頭を抱える。
すると、「安野さーん」と後輩が呼んだ。
「11月3日の新婦、大原様からお電話です」
「キャー！！」
時計を見ると出勤してから1時間が経過している。慌てて保留になっている電話を奪い取った。
「お電話代わりました、安野です！今、メール拝見してまして！お電話先にいただいてしまって申し訳ありません！」
『あ、そうだったんですね。11時に出勤されるって伺ってたんで、伝言が伝わってるか不安になってしまって……』
あああ～……、とちあきは天を仰ぐ。
社会人経験が長い奈緒子の物言いやメールは、決してちあきを直接責めない。しかし、じわじわと刃物を押し付けられているような感覚で、彼女の意思ははっきり伝わってくるのだ。
仮に、奈緒子がものすごくダイレクトな言葉を使ったとすれば、今の台詞は『出勤してすぐにかけてこないってどういうことよ。私のことより優先する仕事があったわけ？』である。
「いろいろと確認を取ってからお電話しようと思ってまして。正確なご解答ができないと、お手間を取らせてしまいますから……ドレスショップの福井に話を聞いたりしてまして」
『ああ、そうだったんですね。こちらこそすみません、そうとも知らずお待ちしてたものですから』
今の台詞は『だったら先に私に電話して時間がかかるって言いなさいよ、人を待たせといて』だ。
ちあきはあらゆる謝り文句を並べに並べて、奈緒子のために時間

を使っていたことを強調し、やっとの思いで電話が遅くなったことからドレスのことに話題を移した。（この時点でだいぶ疲労した。）
『メールで何度か申し上げてますけど、私、追加料金がどのくらいになるのかが本当にわからなくて、知らない料金を次々言われてしまうと困るんです』
「ええ、そうですよね」
『こちらは何せ初めてのことですから。当たり前のようにこれには追加がかかります、って言われても当たり前とは思えなくって』
「ええ、ご不安ですよね。私もできるかぎりご説明するように心がけているんですけど、どうしてもご本人のご希望によって必要なものは変わってくるので。行き届かず申し訳ありません」
『希望って言われても何があるかも分からないわけですから。ドレスもどんなものが着たくなるのか試着してみないと分かりませんでしたし』
「ええ、プラン内のものでご満足される方もいらっしゃれば、こだわって探される方もいらっしゃいますから」
『プラン内のものを選ばれる方いるんですか？』
言外に、プラン内のドレスは不満だと言っている。
「ええ、ご見学の際にも申し上げましたけど、当ホテルではプラン内で選ばれる方がほとんどなんです」
ちあきはここで、「見学の時に説明した」ことをやんわり主張した。
「私がこれまでご担当させていただいたお客様でも、大半がプラン内のものを選ばれてました。カタログお見せした時に、覚えていらっしゃるかわからないですけど、奈緒子さんがお目に留められたドレスもプラン内のものでしたよね」
『ああ、あの時の……そうでしたっけ』
やった、ドレスのカタログを見せて話をしたときのことを思い出してもらえた。
内心必死に、声は落ち着きを保って慎重に言葉を選ぶ。

「このドレスを選ばれたとして……ってお話してお見積作成しましたから、除外料は見積にお載せしなかったんです。後から見返して分かるように備考で書けば良かったですよね。行き届かず申し訳ありません」
あくまで、「見積に載せなかったこと」について謝る形をとる。奈緒子がああ、はぁ……と
考えるような相槌を打っているところに、畳みかけた。
「昨日おさえられたドレスは、お追加5万円のものですよね。よろしければ、それを加えて現時点でのお見積作ってメールでお送りさせていただきます」
『ああ、じゃあそうしてください』
「かしこまりました。お時間遅くなるかもしれませんけど、今日中に作ってお送りします」
奈緒子が毒気を抜かれている間に、何とか話をまとめて電話を終えた。
そっと受話器を置いて、時計を見る。電話をしていたのは20分。しかし、打ち合わせを1本終えた後のように疲労していた。
「どうした。ややこしい客か」
デスクの向こうからかけられた声に、顔を上げる。
いつからか電話を聞いていたらしい上司の宝田が、腕を組んでちあきを見ていた。
「ちょっと、ATT(エーティーティー)っぽいです」
「大丈夫か」
「今回はとりあえず。質問は他で受けないように連絡回します。お金の話になりそうなので」
「わかった。一応日付と両家名、メモ置いとけ」
短い指示だけ残して、宝田は事務所を出て行った。はあ、と無意識にため息が漏れる。
ATTとは、『要注意顧客』の略語だ。この事務所では主に、コンプレイン(苦情)になりそうな客のことを指す。

大原奈緒子はおそらく、何かひとつ間違いを起こせばただでは済ませない。かなりの完璧主義な彼女は、常にあらを探しているようなところがある。

パソコンの画面を操作して、奈緒子の見積を開いた。もう今日は他の事務仕事は諦めて、徹底的に穴のない見積を作ろうと思った。

コンプレになれば、宝田に迷惑をかける。

そうなるのは避けたかった。

36歳7ヶ月　2

ウエディングプランナーの安野ちあきのことを、奈緒子は気に入っている。

奈緒子のメールにきちんと早い返事をくれ、会話の際は奈緒子が言外に含ませた意志をきちんと読み取ってくれるからだ。

年齢こそ若いが（奈緒子より１０歳若い）、言葉遣いもきちんとしているし、打てば響くように回答を返してくる。かつて勤めていた会社の後輩では、こうはいかない。やはり有名ホテルだけあって社員教育がしっかりしている。

奈緒子は口で言うほど結婚式の見積に不安を感じているわけではなかった。

入社してからずっと経理を担当していたため、とりあえず突っ込めるところは突っ込む癖が染み付いているのだ。

後輩たちに「お局様」と呼ばれていたことも分かっている。そんな後輩は半分以上寿退社していったが、たとえ先を越されようとも貴彦と結婚できることでチャラだ。かつて結婚式に呼ばれた後輩は漏れなく招待予定なので、貴彦を見て、完璧な結婚式を見て悔しがるだろう。その顔を見られるならホテルにいくら払おうが気にならない。

ちあきのことを気に入っている理由はもうひとつある。

彼女が提案する結婚式の演出や小道具は、奈緒子の趣味に合っていた。

奈緒子の趣味というのは、たとえば昨今流行の「産まれた時の体重で作るぬいぐるみ」なんかは全く興味がない。あの場面は花束に限る。花束を持って会場を歩く花嫁の姿が重要なのであって、ドレスにぬいぐるみでは全く締まらない。最近は「体重のお米」などもあるらしいが（ぬいぐるみと違って使えるもの、という発想らしい）ドレスに米俵など論外だ。

そういうような、現実主義な（だと自分では思っている）奈緒子に、初めて見学に行った時にちあきは言ったのだ。
「チャペルの前は中庭になってますので、フラワーシャワーもしていただけます。他に、ブーケトスや、バルーンを飛ばしたりする演出も人気ですけど……」
ここでバルーンを勧めてきたら不合格。しかし、ちあきは続けた。
「こんなのはいかがですか？スノーマシーン。フラワーシャワーの時に一緒に雪を降らせるんです。花びらと粉雪が舞い散るような、ロマンチックなシーンになりますよ」
実演して見せられた雪の演出は、たしかに幻想的だった。花びらと混じって降り注ぐ中に立つ、ドレス姿の自分を想像した。
決まりだ。
ポーン、とメールの着信音がした。パソコンだ。
電話で約束したとおり、ちあきが見積を送ってきたのだった。この見積に間違いが見当たらないことも、ちあきに好感を持つ理由だ。（スノーマシーンの料金もきちんと入れてある。）
ドレスの除外料など、大した問題ではなかった。
ただ、穴のようなものを見つけると突っついて値切りたくなるのだ。しかし、実際に穴が簡単に見つかるようでは物足りない。
ちあきの見積は備考がさらに細かく書き込まれ、非常にわかりやすくなっていた。勤めていた頃にこんな後輩がいれば、もう少し嫌味を口にする数も減っただろうに。
携帯を手にして、貴彦に電話をかけた。
一度留守電になる。懲りずにもう一度コールすると、留守電のアナウンスの途中で貴彦が出た。
『奈緒子？急用か？』
「急用ではないけど……相談したいことがあって。結婚式の演出でね、」
『ごめん、仕事の関係の人と飲んでるんだ。またにしてくれ』
「……前もそう言ったじゃない。また連絡するって言うから待って

たのに。あのね、生演奏の演出があるの。ゲストも楽しんでくれると思うから、入れたいんだけど」
『奈緒子の好きにしたら良いよ。また連絡する』
送話口に手を当てて話しているのだろう、くぐもった声が早口で告げて電話は切れた。
通話時間、１分４０秒。今週に入って初めての会話がこれだ。
今日は金曜日だが、週末に会う約束はできていない。
きっと明日の昼も過ぎた頃にメールが入り、日曜の夜の約束をするのがせいぜいだろう。結婚式に向けて山ほど相談したいことがあるのに、貴彦はいつも「奈緒子に任せる」ばかりだ。
結婚後は貴彦の今住んでいるマンションにそのまま住む予定で、家財道具もほとんど揃っているので買いに行く必要もない。それでも今から少しはいじったり、足りないものを買ったりしたいものだが、貴彦が唯一主張したのが、
「結婚までは、うちに勝手に出入りしたり、勝手に変えないで欲しい。それと、土曜日は一日一人でゆっくりさせてほしい」
ということだったので、奈緒子は月曜から土曜まで受け身で待つしかない。
自分も勤めている時はそれでちょうど良かった。辞めてからプロポーズを待つ間は、貴彦に結婚のプレッシャーを与えているように見せないためにわざと予定を詰め込んだ。でも、今は結婚式のことで頭がいっぱいなので暢気に習い事などしている気分ではないし、式の内容を聞かれたくないので友人を誘うのもはばかられる。既婚者の友人に少し話を聞きたい気もしたが、大体が子持ちなのでなかなか優雅にランチとはいかない。
奈緒子はただひたすら一人で、結婚式のことを考えていた。
考えたことをメールでちあきに送り、返事を見てまた考えていた。
情報誌を読み、ネットで調べ、やりたいことも固まってきた。それを相談できる相手は貴彦しかいないのだが、貴彦は興味がない様子でちっともまともに聞いてくれない。

「奈緒子の好きにしていいよ」最初は魅力的に思えたこの台詞が、最近は態のいいあしらい文句に聞こえて奈緒子はもやもやしていた。
貴彦は心底結婚式が億劫なようだ。その態度が、結婚そのものを億劫がっているように感じて、ひいては奈緒子を疎んじているように感じて最近は言いたいことも言えない。
ねえ、私たちほんとに結婚するのよね？
何度か飲み込んだ台詞がまた胸元までせりあがる。
こんなこと誰にも相談できない。自分は、理想的な結婚相手と完璧な結婚式を挙げるのだから。
こんな気持ちもきっと、マリッジブルーも少しあったわと笑い話になるはずなのだから。
奈緒子はもう何度見返したかわからないドレスの試着写真をまた開いた。
もっと考えなくちゃ。当日の楽しいイメージ。
ドレスを身につけて輝いている自分。
うらやましげな友人、後輩たち。
やっぱり生演奏の演出は入れよう、と決めた。披露宴の雰囲気が優雅になる。クラシックには詳しくないので、どんな編成がいいかまたちあきに聞いてみなければ。
奈緒子は気を取り直して、パソコンの画面に向かってメールを打ち始めた。

３６歳７ヶ月　２（後書き）

お気に入り登録がいつの間にか２０件を超えていました。
本当にありがとうございます！励みになります！
相変わらずのノロノロ更新ですが、最後までお付き合いくださいませ。

36歳8ヶ月　1

打合せの席で、ちあきはもうずいぶん長い間黙っていた。
口を挟める雰囲気ではなかったのだ。だからといって席を外すわけにもいかず、どうにか何かを言って流れを変えたいのだがどうにも隙間が見つからない。
「こんなデザインじゃ恥ずかしくて誰にも渡せないんだよ。僕の立場も考えてくれよ」
「恥ずかしいって何？これくらい普通よ。そっちの方が恥ずかしくて無理。私のセンスが疑われるわよ」
「センスなんて大した問題じゃない」
「大した問題じゃないって何！？私にだって面子があるんだから」
「友だちに対してとかそんなのだろ？僕は仕事での立場があるんだ」
「結婚式のことは私に任せるって言ったくせに！」
「ほとんど任せるけど、すべて任せるとは言ってない。必要なことは言うさ」
「私が相談したこと全部耳も貸さなかったくせに！」
「落ち着けよ。周りに迷惑だろ」
「ひどい！私一人が騒いでるみたいに」
二人の目の前には、招待状のサンプルが二種類ある。
ひとつは上質な厚い台紙に金縁、寿の箔押しが入ったもの。おそらく親の時代から使われてきているようなデザインだ。
もうひとつは、かわいらしいピンクゴールドで指輪の柄と額縁模様の箔押しが入った、上品なデザインのもの。横書きのタイプで、ｉｎｖｉｔａｔｉｏｎとデザイン文字が入っている。
今日は、貴彦と奈緒子二人の一回目の打ち合わせだった。
招待状のデザインについてちあきが説明し、サンプル集を広げて選んでくださいと言うや否や、貴彦が「これにしよう」と指差したのが、サンプル集の一番最初にあった、前者の伝統的なタイプの招

待状だった。
「……一通り見てから決めましょうよ。ね？」
ちあきと話す時とは微妙に違う口調で、奈緒子がサンプル集を自分の方に引き寄せ、めくりながら「ほらこれもおしゃれだし。こんなのも上品でいいわよ？」と一つ一つ見ていくが、貴彦はむっつり押し黙っていた。
やがて奈緒子がシンプルながらも上品でかわいらしい、指輪のデザインを「やっぱりこれがいいと思うな。ね、どう？」と選び出すと、貴彦はきっぱり言ったのだった。
「だめだ。最初のデザインでないと無理だよ」
奈緒子は、はじめは穏やかに抵抗した。しかし、貴彦の意思が変わらないのを見て、だんだんと声を荒げ始めたのだ。
そして今に至るまで、ちあきは一言も口を挟めていない。
「衣裳のことも、演出のことも、あなた話も聞いてくれなかったじゃない！奈緒子の好きにしたらいいってきれいごと言って、結婚式に興味なんかないくせに、こんなときばっかり！」
「興味がなくたってやらなきゃいけないものは仕方ないじゃないか。衣裳も演出も好きにしたらいいけど、招待状はダメだ。相手があることなんだから」
「ふざけないでよ！」
奈緒子の声が悲鳴に近くなった。
打ち合わせブースは区切られているものの、少し大声を出せば隣の声は筒抜けだ。そして、日曜の昼間の現在ブースは満席で、周り中が息を潜めて様子を伺っている気配がする。
これは、いい加減にどうにかしなくちゃ……焦ったちあきは、
「あ、あの！」
とりあえず無理やり割って入った。
「話を、戻しましょう？杉本様、どうしてこのデザインでないといけないのか、もう一度きちんと奈緒子さんにおっしゃってくださいませんか」

本当は個室に誘導したいところだが、あいにく個室も満席だ。
「奈緒子さんの選ばれたものも、皆様ご使用になられている何も問題のないデザインです。
それでも選ぶことのできない理由がおありになるのなら、それをご説明なさってください。でないと奈緒子さんもご納得いかないかと」
貴彦が初めてちあきの方を見て表情を動かした。
契約の日以来４ヶ月ぶりに会うが、その４ヶ月前にも全くと言っていいほど貴彦は表情を変えなかった。必要最低限のことをぽつりぽつりと聞くくらいで、典型的な無関心型の新郎だと思ったものだったが。
「担当さんの言うとおりだ。奈緒子、説明するから聞いてくれ」
どうやら名前も覚えられていないようだ。別にいいけどね、と内心やさぐれつつ、ちあきは奈緒子の表情をうかがった。
唇を噛みしめてうつむく奈緒子は、貴彦の方を見ようとしなかった。
「僕は仕事の関係の方をたくさん招待する。その中には、とても格式を重んじる方もいらっしゃるんだ。今時の洒落た招待状がいろいろあるのは分かるが、僕がその方をご招待するのにそういった浮かれたデザインを使うことはありえない」
貴彦は弁護士というだけあり、理路整然と隙のない話し方をする。
奈緒子の肩の線がまた、少し硬くなるのが見えた。
ちあきは、本当は奈緒子の味方をしてあげたかった。どんな時でも新婦の味方になるのはプランナーとして心がけていることのひとつだ。色々と困らされることもある新婦だが、同じ女性としておしゃれなデザインを選びたい気持ちは良くわかる。
しかし、招待状というものはひとつ間違うと危険なのだ。
結婚式の当日なら、多少の粗相があっても祝い事だからと見逃してもらえることは多いが、事前に届く招待状はそうはいかない。今時は手渡しでなく郵送で一方的に送りつける分相手の反応も見えな

いし、万一悪印象を与えれば取り消せない。
だから、ここは堅く堅くいく方が無難だし、貴彦のように明らかに格式を重んじる相手がいると分かっている場合は当然そちらを優先するべきなのだ。
……そのことを。ちあきの口から説明しても、今のこの場では意味がなかった。
貴彦の言葉に奈緒子が納得しないと、この二人はうまくいかない。奈緒子の不満はこの場のことだけじゃない。ここできちんと向き合わなければ———
「……わかった。ごめんなさい。あなたの選んだものにしましょう」
あ。
顔を上げた奈緒子は、笑顔だった。
張り付けた。
ちあきには、奈緒子が一瞬のうちに表情を作り上げる様子が見えるようだった。奈緒子はここで向き合うことをやめて、心を鎧う事を選んだのだった。
「その代わり、当日のテーブルコーディネートのペーパーアイテムは好きにしてもいい？」
「かまわないよ。奈緒子に任せる」
貴彦は明らかにほっとした様子で、これまでの流れをぶった切った奈緒子の笑顔の提案に乗っかった。
「すみませんでした安野さん。そういうことで、このデザインでお願いします」
奈緒子が鉄壁の笑顔をちあきに向ける。ちあきは頷きながらも、これまで要注意顧客と思って接してきた奈緒子に対する印象が、微妙に変化していくのを感じていた。

36歳8ヶ月　1（後書き）

前の更新からずいぶん間が空いてしまいました。
娘がなかなか寝てくれず、書きに来れませんでした。次もゆっくりになってしまうかと思いますが、少しずつ話も動いてきましたので、できるだけ早く更新したいと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9822t/

ウエディングプランナー

2011年10月20日03時10分発行